

オープンスペース型運営方式・教科センター方式検証報告書
【概要版】

令和元年 12月

板橋区教育委員会

板橋区では、これまでいくつかの小学校でオープンスペース型運営方式を導入してきたが、平成19年度に改築した大谷口小学校、平成24年度に改築した板橋第一小学校でもこの方式を導入し、中学校においては平成24年度に改築した赤塚第二中学校、平成27年度に改築した中台中学校で教科センター方式を新しい学校運営方式として導入した。

新しい学校運営方式の導入のねらいとして、小学校のオープンスペース型運営方式については、新しい教育方法への対応、将来の変化に柔軟に対応できる施設とし、中学校の教科センター方式については、教科指導の充実、主体的な学習態度の育成等を導入のねらいとし、改築を行った。

平成27年8月に行った前回報告では、板橋第一小学校及び赤塚第二中学校へのヒアリング結果と施設のデータを基に検証し、オープンスペース型運営方式・教科センター方式の想定されたメリットがヒアリングにより確認された。

一方で、オープンスペース型運営方式については普通教室の配置は向かい合うレイアウト（大谷口小学校）ではなく、並列型（板橋第一小学校）の方が教室と面した廊下をオープンスペースと一体的に活用でき、授業を支障なく行えるという意見があった。教科センター方式については学級への帰属意識の醸成やホームベース、メディアスペースの稼働率の向上などが課題として挙げられた。

さらに、両方式共通のこととして、施設面からは延べ床面積の増大とそれに伴う改築費用の増加、光熱水費の増加をはじめとした維持管理経費の増、空調設備の清掃や延床面積の増加に伴う清掃業務の負担増などの課題も挙げられた。

今回の検証においては、オープンスペース型運営方式・教科センター方式のメリットや課題の再検証を行うためのアンケートを行った。オープンスペース型運営方式としては、大谷口小学校・板橋第一小学校を対象とし、教科センター方式としては、赤塚第二中学校・中台中学校を対象とした。さらに、中台中学校に加えて、改めて板橋第一小学校・赤塚第二中学校について、学校長へのヒアリングを行った。

また、教科教室型運営方式を採用している板橋第五中学校、一部教科教室型を採用する上板橋第二中学校、板橋第三中学校をあわせて比較検証し、この検証と評価を、これから改築を行う学校施設の整備に際し、長期間に渡りよりよい学校運営方式が可能になるよう参考に資するものとしてとりまとめた。

オープンスペース型運営方式の効果検証

オープンスペース型運営方式のねらい

学習環境の変化に柔軟な対応をし、多様な学習活動を実現する。

検証の目的

- ◆ メリット・課題の再検証
- ◆ 将来にわたりより良い学校運営方式の検証
- ◆ 既存校舎や学校施設整備の際の参考に資するもの

今回検証対象校：大谷口小学校、板橋第一小学校

前回・今回の検証から

《分析結果・成果》

- ・ 学年活動、学級活動に有意義なスペースである
- ・ オープンスペースの配置によりその効果に差が生じ、並列型の方が効果が高い
- ・ 学力の向上について、全国学力・学習状況調査の結果を見る限り、成果は顕著にみられない

オープンスペースを活用した授業は、大変質の高いものとして実施された。だが、そのレベルを恒常的に維持していくには、什器・教材の準備、授業の準備、教材の選択・研究など教員にかかる負担が大きすぎ、継続が困難であることが確認された。これは他自治体においても同様に見られる傾向である。

《課題》

- ・ 特別な支援を要する児童に対して、聴覚的・視覚的な配慮が必要である
- ・ 延床面積の増大とそれに伴う改築経費の増
- ・ 空調効率が良くなく、維持管理経費の増に繋がっている
- ・ 廊下側に壁がないため、掲示スペースの減、音環境に支障がある

課題への対応

多様でダイナミックな授業展開ができる環境、学年や異学年交流の活発化、掲示スペースの確保、空調効率を上げるため、可動式間仕切りを導入全校で設置。

方向性

授業内容に合わせた柔軟性のある空間づくり

- ◆ 多様な授業が展開できるなど効果が認められるため、オープンスペース型運営方式の良いところを取り入れた形で継続していく
- ◆ 掲示スペースの確保及び落ち着かないなど配慮を要する児童のために、教室に可動式間仕切りを設置するなど、ニーズに応じて対応できる態勢を整える
- ◆ 将来の授業内容・方法の変化に柔軟に対応するため、様々な使用方法に対応できる空間として設置方法を検討していく

(オープンスペースの考え方)

フレキシブルに活用可能な、大空間と小空間の効率良い使用

設置方法により、オープンスペースとしてのみの使用に限定するのではなく、アクティブラーニングから習熟度別少人数指導まで、多目的に使える空間（教室）を設け、可動式間仕切り等により大きな空間、小さな空間を生み出し、授業の方法に合わせ空間を変化させていくことが可能なマルチスペースを設置していく。

効率の良い空間の創出により、延床面積の増加を抑え、ICT機器の充実にシフトし、教員の負担を抑え、将来の状況の変化にも対応し、持続可能なしつらえを目標としていく。

教科センター方式の効果検証

教科センター方式のねらい

教科指導の充実、主体的な学習態度の育成

検証の目的

- ◆ メリット・課題の再検証
- ◆ 将来にわたりより良い学校運営方式の検証
- ◆ 既存校舎や学校施設整備の際の参考に資するもの

今回検証対象校

教科センター方式：赤塚第二中学校、中台中学校

教科教室型運営方式：板橋第三中学校、上板橋第二中学校、板橋第五中学校

前回・今回の検証から

《分析結果・成果》

- ・学力については全国学力・学習状況調査の結果において年々その向上が見られ、赤塚第二中学校は都平均を上回り、中台中学校は都平均前後である
→大学との連携による授業改善の継続が、効果をもたらす結果となっている
- ・学習への主体的、能動的な意識や態度が身に付く
- ・教科教室で学ぶことで、授業に集中できる
- ・教室移動があるため時間を考えて行動している
- ・生徒に自分の学級、自分の机という意識があまり高まらないのではという懸念がみられたが、生徒のクラスへの帰属意識は醸成されているという意見が多い

《課題》

- ・学級数増による教科センター方式維持が難しい
※ 赤塚第二中学校を例にすると、教科教室が各教科3教室のところ、現5クラスの学年があり、これ以上増加すると教科センター方式の維持が難しい
- ・特別に配慮を要する生徒への配慮が必要
- ・感染症疾患罹患への懸念がある
- ・赤塚第二中学校のホームルームの稼働率が低い
- ・教科教員室の使用頻度が低い
- ・延床面積の増加に伴い校庭の面積が縮小されるとともに、改築経費が増加している

課題への対応

- ・感染症罹患については、教科センター方式との関係性はみられない

【教科教室型運営方式】

板橋第三中学校、上板橋第二中学校では、学級に割り当てていない教室（特別活動室）等を利用して一部教科で教科センター方式と同じ教科教室型運営方式を実施している（上板橋第二中学校は現在改築中であり、新校舎では中台中学校と同じホームベース併設型の教科センター方式を導入予定である。）。板橋第五中学校は、全ての教科で教科教室型運営方式を実施しており、全国学力・学習状況調査の結果は、区の上位を占めるようになった。教科センター方式の学校も、授業の運営方式は、板橋第五中学校と同じ教科教室型運営方式であり、板橋第三中学校、上板橋第二中学校もほぼ同様である。板橋第三中学校は、英語と数学で習熟度別少人数指導を展開しており、従来の特別教室を使用する教科を除くと、国語と社会以外は教科教室による授業と捉えることができ、全国学力・学習状況調査の結果も上向いている。

また、教科メディアスペースのねらいである教科の魅力や学習のねらいを伝える機能の代替として、廊下や空きスペースを活用し掲示を工夫する取り組みを行っている。

この運営方式の特徴は、主体的かつ能動的な行動意識が身につけられる等、教科センター方式と同様の効果が期待できるところである。また、改築を行っていない学校でも取り組めるところにある。

方向性

メリット（成果）を取り入れながらデメリット（課題）を極力抑える

- ◆ 生徒の居場所、帰属意識の醸成、学級数増対応は、全部または一部教科教室型で教科教室を学級に割り当て自分の居場所としての教室を確立し対応していく
- ◆ 今回の検証で確認した成果は、教科教室型運営方式によるところが大きいので、教科教室型運営方式は継続していく
- ◆ 教科教員室については、学年経営の充実という視点から教員が職員室に集まることが多く、在席の割合は低い。
- ◆ 教科教員室・メディアスペースの見直しを行い、規模の縮小化を検討する

（教科センター方式の考え方）

従来の校舎でも展開できる教科教室型運営方式を継続していく

《改築校》

学級に割り当てていない、特別活動室など、多目的に使える教室を増やし、一方で教科教員室やメディアスペースを絞ることにより延床面積の増加を抑え、施設の最適化を図っていく。メディアスペースが担っていた「教科の魅力発信」はスペースの有効活用やICT機器の活用により代替していく。今後、ICT化を推進し、新しい教育方法など、授業の変化に対応していく。

《既存校》

学級に割り当てていない教室を創り出す工夫を行い、教室数を増やし、教科教室型運営方式を実施することができる。実施校における教室を創り出す等のノウハウを全校で共有していく。また、その際ICT機器の設置及び大学との連携は必須である。

稼働率の低いスペースを見直し、柔軟に対応できる教室を設けることにより、一時的な生徒数増に対応しながらも延床面積の増大化を抑えていく。限られた財源を有効活用することが重要であり、ハードからソフトへシフトし、ICT機器の充実に注力し、将来の社会・教育方法の変化に対応していく。

オープンスペース型運営方式・教科センター方式検証報告書について

新しい学校運営方式については、平成27年8月に「新しい学校運営方式 オープンスペース方式、教科センター方式検証報告書」として教育委員会に報告（以下前回報告という）を行った。

前回報告から4年経過し、前回報告で挙げられたメリットや課題の再検証を行うため、関係各校へのアンケート及びヒアリングを実施した。この検証と評価をこれから改築を行う学校施設の整備に際し、より良い学校運営方式の参考に資するものとして取りまとめたので、報告する。

1 前回報告後の検討経過

(1) アンケート実施 平成30年11月～12月

対象校：板橋第一小学校、大谷口小学校、中台中学校、
赤塚第二中学校

対象：小学校については3年生以上の児童及び教職員
中学校については全生徒・保護者・教職員

回収数：小学校児童用503件、教職員用30件

中学校生徒用738件、保護者用461件、教職員用36件

(2) ヒアリング調査 令和元年5月～9月

対象校：板橋第一小学校、板橋第三中学校、板橋第五中学校、
上板橋第二中学校、中台中学校、赤塚第二中学校

対象：校長及び副校長

2 調査範囲

(1) アンケートを、オープンスペース型運営方式・教科センター方式を取り入れて整備した学校に実施した。

(2) ヒアリング対象校を、教科教室型運営方式(一部含む)を採用する学校まで拡大した。

オープンスペース型運営方式・教科センター方式検証報告書
【概要版】

令和元年 12月

板橋区教育委員会

板橋区では、これまでいくつかの小学校でオープンスペース型運営方式を導入してきたが、平成19年度に改築した大谷口小学校、平成24年度に改築した板橋第一小学校でもこの方式を導入し、中学校においては平成24年度に改築した赤塚第二中学校、平成27年度に改築した中台中学校で教科センター方式を新しい学校運営方式として導入した。

新しい学校運営方式の導入のねらいとして、小学校のオープンスペース型運営方式については、新しい教育方法への対応、将来の変化に柔軟に対応できる施設とし、中学校の教科センター方式については、教科指導の充実、主体的な学習態度の育成等を導入のねらいとし、改築を行った。

平成27年8月に行った前回報告では、板橋第一小学校及び赤塚第二中学校へのヒアリング結果と施設のデータを基に検証し、オープンスペース型運営方式・教科センター方式の想定されたメリットがヒアリングにより確認された。

一方で、オープンスペース型運営方式については普通教室の配置は向かい合うレイアウト（大谷口小学校）ではなく、並列型（板橋第一小学校）の方が教室と面した廊下をオープンスペースと一体的に活用でき、授業を支障なく行えるという意見があった。教科センター方式については学級への帰属意識の醸成やホームベース、メディアスペースの稼働率の向上などが課題として挙げられた。

さらに、両方式共通のこととして、施設面からは延べ床面積の増大とそれに伴う改築費用の増加、光熱水費の増加をはじめとした維持管理経費の増、空調設備の清掃や延床面積の増加に伴う清掃業務の負担増などの課題も挙げられた。

今回の検証においては、オープンスペース型運営方式・教科センター方式のメリットや課題の再検証を行うためのアンケートを行った。オープンスペース型運営方式としては、大谷口小学校・板橋第一小学校を対象とし、教科センター方式としては、赤塚第二中学校・中台中学校を対象とした。さらに、中台中学校に加えて、改めて板橋第一小学校・赤塚第二中学校について、学校長へのヒアリングを行った。

また、教科教室型運営方式を採用している板橋第五中学校、一部教科教室型を採用する上板橋第二中学校、板橋第三中学校をあわせて比較検証し、この検証と評価を、これから改築を行う学校施設の整備に際し、長期間に渡りよりよい学校運営方式が可能になるよう参考に資するものとしてとりまとめた。

オープンスペース型運営方式の効果検証

オープンスペース型運営方式のねらい

学習環境の変化に柔軟な対応をし、多様な学習活動を実現する。

検証の目的

- ◆ メリット・課題の再検証
- ◆ 将来にわたりより良い学校運営方式の検証
- ◆ 既存校舎や学校施設整備の際の参考に資するもの

今回検証対象校：大谷口小学校、板橋第一小学校

前回・今回の検証から

《分析結果・成果》

- ・ 学年活動、学級活動に有意義なスペースである
- ・ オープンスペースの配置によりその効果に差が生じ、並列型の方が効果が高い
- ・ 学力の向上について、全国学力・学習状況調査の結果を見る限り、成果は顕著にみられない

オープンスペースを活用した授業は、大変質の高いものとして実施された。だが、そのレベルを恒常的に維持していくには、什器・教材の準備、授業の準備、教材の選択・研究など教員にかかる負担が大きすぎ、継続が困難であることが確認された。これは他自治体においても同様に見られる傾向である。

《課題》

- ・ 特別な支援を要する児童に対して、聴覚的・視覚的な配慮が必要である
- ・ 延床面積の増大とそれに伴う改築経費の増
- ・ 空調効率が良くなく、維持管理経費の増に繋がっている
- ・ 廊下側に壁がないため、掲示スペースの減、音環境に支障がある

課題への対応

多様でダイナミックな授業展開ができる環境、学年や異学年交流の活発化、掲示スペースの確保、空調効率を上げるため、可動式間仕切りを導入全校で設置。

方向性

授業内容に合わせた柔軟性のある空間づくり

- ◆ 多様な授業が展開できるなど効果が認められるため、オープンスペース型運営方式の良いところを取り入れた形で継続していく
- ◆ 掲示スペースの確保及び落ち着かないなど配慮を要する児童のために、教室に可動式間仕切りを設置するなど、ニーズに応じて対応できる態勢を整える
- ◆ 将来の授業内容・方法の変化に柔軟に対応するため、様々な使用方法に対応できる空間として設置方法を検討していく

(オープンスペースの考え方)

フレキシブルに活用可能な、大空間と小空間の効率良い使用

設置方法により、オープンスペースとしてのみの使用に限定するのではなく、アクティブラーニングから習熟度別少人数指導まで、多目的に使える空間（教室）を設け、可動式間仕切り等により大きな空間、小さな空間を生み出し、授業の方法に合わせ空間を変化させていくことが可能なマルチスペースを設置していく。

効率の良い空間の創出により、延床面積の増加を抑え、ICT機器の充実にシフトし、教員の負担を抑え、将来の状況の変化にも対応し、持続可能なしつらえを目標としていく。

教科センター方式の効果検証

教科センター方式のねらい

教科指導の充実、主体的な学習態度の育成

検証の目的

- ◆ メリット・課題の再検証
- ◆ 将来にわたりより良い学校運営方式の検証
- ◆ 既存校舎や学校施設整備の際の参考に資するもの

今回検証対象校

教科センター方式：赤塚第二中学校、中台中学校

教科教室型運営方式：板橋第三中学校、上板橋第二中学校、板橋第五中学校

前回・今回の検証から

《分析結果・成果》

- ・学力については全国学力・学習状況調査の結果において年々その向上が見られ、赤塚第二中学校は都平均を上回り、中台中学校は都平均前後である
→大学との連携による授業改善の継続が、効果をもたらす結果となっている
- ・学習への主体的、能動的な意識や態度が身に付く
- ・教科教室で学ぶことで、授業に集中できる
- ・教室移動があるため時間を考えて行動している
- ・生徒に自分の学級、自分の机という意識があまり高まらないのではという懸念がみられたが、生徒のクラスへの帰属意識は醸成されているという意見が多い

《課題》

- ・学級数増による教科センター方式維持が難しい
※ 赤塚第二中学校を例にすると、教科教室が各教科3教室のところ、現5クラスの学年があり、これ以上増加すると教科センター方式の維持が難しい
- ・特別に配慮を要する生徒への配慮が必要
- ・感染症疾患罹患への懸念がある
- ・赤塚第二中学校のホームルームの稼働率が低い
- ・教科教員室の使用頻度が低い
- ・延床面積の増加に伴い校庭の面積が縮小されるとともに、改築経費が増加している

課題への対応

- ・感染症罹患については、教科センター方式との関係性はみられない

【教科教室型運営方式】

板橋第三中学校、上板橋第二中学校では、学級に割り当てていない教室（特別活動室）等を利用して一部教科で教科センター方式と同じ教科教室型運営方式を実施している（上板橋第二中学校は現在改築中であり、新校舎では中台中学校と同じホームベース併設型の教科センター方式を導入予定である。）。板橋第五中学校は、全ての教科で教科教室型運営方式を実施しており、全国学力・学習状況調査の結果は、区の上位を占めるようになった。教科センター方式の学校も、授業の運営方式は、板橋第五中学校と同じ教科教室型運営方式であり、板橋第三中学校、上板橋第二中学校もほぼ同様である。板橋第三中学校は、英語と数学で習熟度別少人数指導を展開しており、従来の特別教室を使用する教科を除くと、国語と社会以外は教科教室による授業と捉えることができ、全国学力・学習状況調査の結果も上向いている。

また、教科メディアスペースのねらいである教科の魅力や学習のねらいを伝える機能の代替として、廊下や空きスペースを活用し掲示を工夫する取り組みを行っている。

この運営方式の特徴は、主体的かつ能動的な行動意識が身につけられる等、教科センター方式と同様の効果が期待できるところである。また、改築を行っていない学校でも取り組めるところにある。

方向性

メリット（成果）を取り入れながらデメリット（課題）を極力抑える

- ◆ 生徒の居場所、帰属意識の醸成、学級数増対応は、全部または一部教科教室型で教科教室を学級に割り当て自分の居場所としての教室を確立し対応していく
- ◆ 今回の検証で確認した成果は、教科教室型運営方式によるところが大きいので、教科教室型運営方式は継続していく
- ◆ 教科教員室については、学年経営の充実という視点から教員が職員室に集まることが多く、在席の割合は低い。
- ◆ 教科教員室・メディアスペースの見直しを行い、規模の縮小化を検討する

（教科センター方式の考え方）

従来の校舎でも展開できる教科教室型運営方式を継続していく

《改築校》

学級に割り当てていない、特別活動室など、多目的に使える教室を増やし、一方で教科教員室やメディアスペースを絞ることにより延床面積の増加を抑え、施設の最適化を図っていく。メディアスペースが担っていた「教科の魅力発信」はスペースの有効活用やICT機器の活用により代替していく。今後、ICT化を推進し、新しい教育方法など、授業の変化に対応していく。

《既存校》

学級に割り当てていない教室を創り出す工夫を行い、教室数を増やし、教科教室型運営方式を実施することができる。実施校における教室を創り出す等のノウハウを全校で共有していく。また、その際ICT機器の設置及び大学との連携は必須である。

稼働率の低いスペースを見直し、柔軟に対応できる教室を設けることにより、一時的な生徒数増に対応しながらも延床面積の増大化を抑えていく。限られた財源を有効活用することが重要であり、ハードからソフトへシフトし、ICT機器の充実に注力し、将来の社会・教育方法の変化に対応していく。

オープンスペース型運営方式・教科センター方式検証報告書

令和元年 12月

板橋区教育委員会

目次

第1部	検証報告のねらい	
第2部	オープンスペース型運営方式	
1	オープンスペース型方式運営実施校の状況	3
(1)	オープンスペース型運営方式の導入	3
(2)	基礎資料	3
2	オープンスペース型運営方式の成果に関する調査	4
(1)	学力の向上	4
(2)	児童、教職員アンケート	5
3	オープンスペース型運営方式の課題	7
(1)	前回報告からの課題	7
(2)	アンケートから見た課題	7
(3)	ヒアリング等による課題	8
4	施設面からの分析（改築前との比較）	9
(1)	オープンスペース設置による延床面積の比較	9
(2)	オープンスペース設置による改築経費の比較	9
(3)	電気・ガス使用量比較	9
5	オープンスペース型運営方式改築校の検証結果	11
第3部	教科センター・教科教室型運営方式	
1	教科センター方式実施校の状況	12
(1)	教科センター方式の導入	12
(2)	基礎資料	13
2	教科センター方式の成果に関する調査	15
(1)	学力の向上	15
(2)	生徒・保護者・教職員アンケート	15
3	教科センター方式の課題	18
(1)	前回報告からの課題	18
(2)	アンケートから見た課題	19
(3)	ヒアリング等による課題	21
4	施設面から見た分析概要（改築前との比較）	22
(1)	教科センター方式設置による延床面積の比較	22
(2)	教科センター方式設置による改築経費の比較	22
(3)	電気・ガス使用量比較	22
5	教科教室型運営方式実施校の現状と課題	24
(1)	教科教室型運営方式	24
(2)	基礎資料	24
6	教科教室型運営方式による成果に関する調査（学力学習状況調査結果より）	28
7	教科センター方式改築校及び教科教室型運営方式の検証結果	28
(1)	教科センター方式	28
(2)	教科教室型運営方式	28
第4部	まとめ	
1	オープンスペース型運営方式について	30
2	教科センター方式について	31
3	教科教室型運営方式について	31

第1部 検証報告のねらい

板橋区では、これまでいくつかの小学校でオープンスペース型運営方式を導入してきたが、平成19年度に改築した大谷口小学校、平成24年度改築の板橋第一小学校でもこの方式を導入した。

また、中学校においては平成24年度に改築した赤塚第二中学校、平成27年度改築の中台中学校で教科センター方式を新しい学校運営方式として導入して改築した。

新しい学校運営方式の導入のねらいとして、小学校のオープンスペース型運営方式については、新しい教育方法への対応、将来の変化に柔軟に対応できる施設としている。

その導入メリットとして

- 1 教員同士が協働して授業や授業準備、環境づくりを進めることができる
- 2 体験的な学習や探究学習等多様な学習の展開ができる
- 3 個別・小集団学習が行いやすい
- 4 身近に教材を用意することができる
- 5 教材や作品の展示や掲示を通じて学習への動機付けが図れ、自分に誇りを持てる発表の場となる

等が掲げられる。

中学校の教科センター方式については、教科指導の充実、主体的な学習態度の育成等を導入のねらいとしている。

その導入メリットとして

- 1 教科ごとに必要な設備・什器・教材等を用意し、それぞれの教科の特性や授業の狙いに応じた環境を整えることにより教科指導の充実が図れる
- 2 教室や教科スペースの環境をとおして生徒が教科への興味・関心を高めるとともに、学習の狙いを知り、感じることができる
- 3 生徒自ら次の教室に移動することで、学習への主体的・能動的な意識や態度を身に付けられる
- 4 幅広い交流の中で人間的な成長を遂げることができる

等が掲げられる。

前回報告では、板橋第一小学校及び赤塚第二中学校へのヒアリング結果と施設のデータを基に検証した。オープンスペース型運営方式・教科センター方式の想定されたメリットがヒアリングにより確認された。一方で、オープンスペース型運営方式については普通教室の配置は向かい合うレイアウトではなく、並列型の方が教室と面した廊下をオープンスペースと一体的に活用でき、授業を支障なく行えるという意見があった。教科センター方式については学級への帰属意識の醸成やホームベース、メディアスペース稼働率の向上などが課題として挙げられた。さらに、両方式共通のこととして、施設面からは延べ床面積の増大とそれに伴う改築費用の増加、光熱水費の増加をはじめとした維持管理経費の増、空調設備の清掃や延床面積の増加に伴う清掃業務の負担増などの課題も挙げられた。

今回の検証においては、オープンスペース型運営方式・教科センター方式のメリットや課題の再検証を行うためのアンケートを行った。オープンスペース型運営方式としては、直近にオープンスペース型運営方式を導入して改築した大谷口小学校・板橋第一小学校を対象とし、教科センター方式としては、赤塚第二中学校・中台中学校の教科センター方式を導入した各校を対象とした。さらに、直近の改築校である板橋第一小学校・赤塚第二中学校・中台中学校については、学校長へのヒアリングも行った。

また、教科教室型運営方式を採用している板橋第五中学校、一部教科教室型を採用する上板橋第二中学校、板橋第三中学校をあわせて比較検証し、この検証と評価を、これから改築を行う学校施設の整備に際し、長期間に渡りよりよい学校運営方式が可能になるよう参考に資するものとしてとりまとめた。

第2部 オープンスペース型運営方式

1 オープンスペース型運営方式実施校の状況

(1) オープンスペース型運営方式の導入

区立小学校では、これまでいくつかの学校で導入してきたが、学習環境の変化に柔軟な対応ができ、多様な学習形態に対応できる学校施設を実現するため、大谷口小学校と板橋第一小学校の2校においても改築を機に「オープンスペース型運営方式」を導入した。

オープンスペース型運営方式とは、普通教室に隣接した空間を設置し、教室の壁面を取り払うことで、教室と一体となった大きな空間を生み出し、この空間を活用した多様な学習活動を実現する方式である。

なお、現在改築中の板橋第十小学校もこの方式によって整備を進めている。

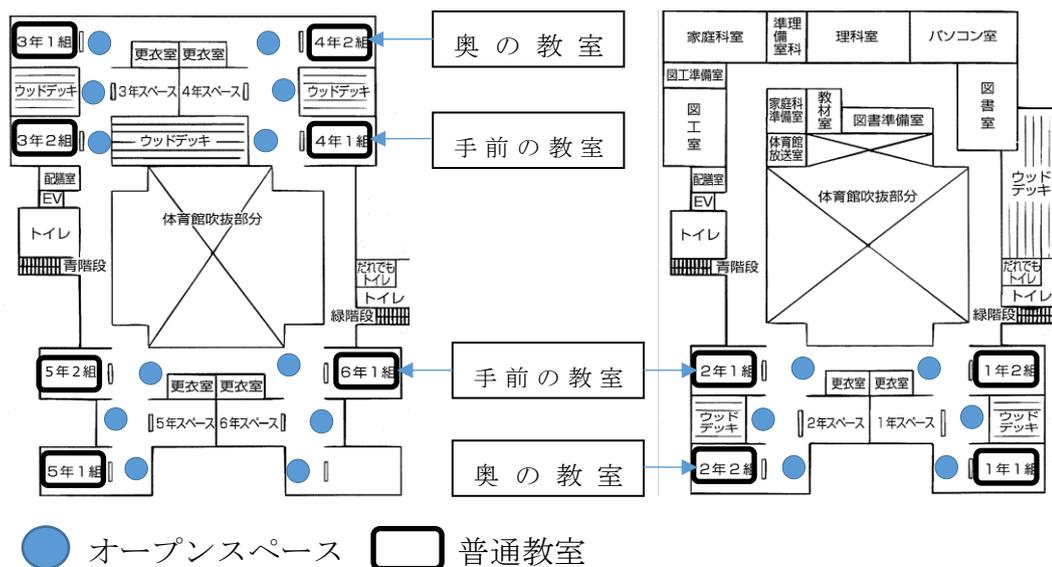
(2) 基礎資料

① 大谷口小学校

- ・改築年度 平成19年度 ・新校舎使用開始 平成20年4月～
- ・学校規模 校地面積：10,339㎡、延床面積：7,637㎡、校庭面積4,074㎡
- ・改築前後の児童数・学級数推移

年度	平成16 (改築前)	～	平成20 (改築後)	～	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元
児童数	359		380		330	312	316	292	296	301
学級数	12		13		12	12	12	12	11	11

図：大谷口小学校校舎平面図



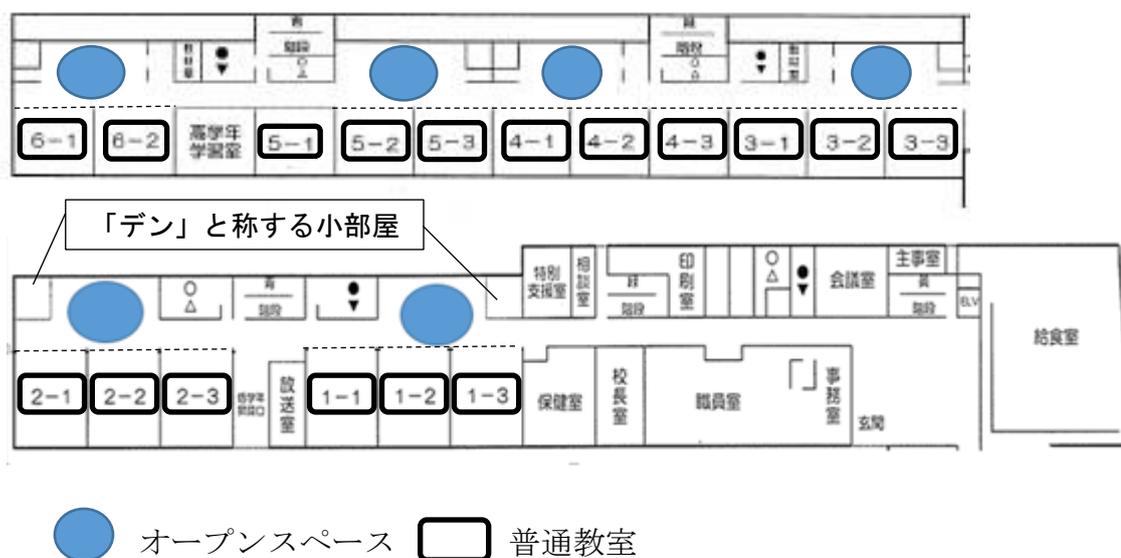
※体育館を中心に「手前の教室」と「奥の教室」に分けると、「奥の教室」に行くためには、「手前の教室」のオープンスペースを通過する必要がある。

② 板橋第一小学校

- ・改築年度 平成 24 年度 ・新校舎使用開始 平成 25 年 4 月～
- ・学校規模 校地面積：10,038 m²、延床面積：8,351 m²、校庭面積 5,916 m²
- ・改築前後の児童数・学級数推移

年 度	平成 22 (改築前)	～	平成 25 (改築後)	平成 26	平成 27	平成 28	平成 29	平成 30	令和 元
児童数	333		364	370	405	440	457	521	557
学級数	12		12	12	13	14	15	16	17

図：板橋第一小学校校舎平面図



2 オープンスペース型運営方式の成果に関する調査

(1) 学力の向上

学力の向上については、毎年4月に小学校6年生対象に実施される「全国学力・学習状況調査」(国語A・B、算数A・B、3年ごとに理科)の平成25年度から30年度の6年間の結果を基に検証した。

平成19年度に改築を行った大谷口小学校では、オープンスペースを活用した単元内自由進度学習を開発し研究を行った。学力調査の結果は、6年間の推移をみると全体的に緩やかな上昇傾向がみられ、平成30年度には国語Aは都平均(74点)を上回った。他の教科も平成25年度から比べると区平均に近づき、上回る教科も出ている。

平成24年に改築を行った板橋第一小学校では、大谷口小学校の研究をさらに発展させ、オープンスペースを活用した単元内自由進度学習等の多様な学習形態の研究を推進した。学力調査の結果は、改築の翌年は都平均よりも上回る状態であったが、その後2年間は区平均を下回り、平成28年には都平均を大きく上回った。6年間の推移をみると、平均に対してばらつきが大きい傾向がみられた。

単元内自由進度学習とは？

最初に授業の目的・内容・方法を説明し、その後は児童が自分のペースにあわせて、単元の目的に向けた学習を行い、授業の最後にまとめを行う学習方法

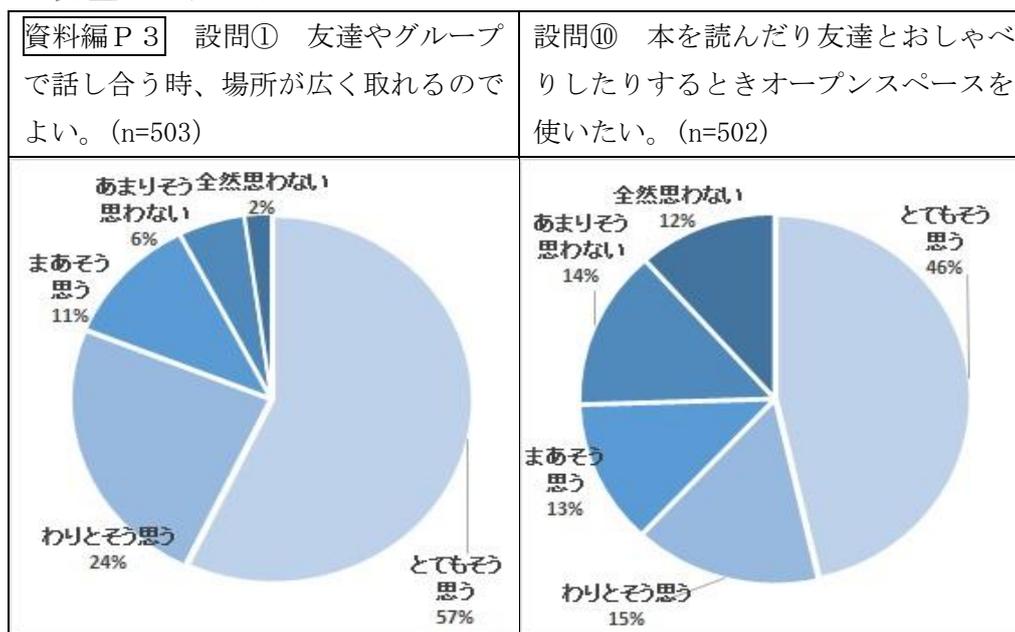
(2) 児童、教職員アンケート

① アンケート調査の概要

学校名	大谷口小学校	板橋第一小学校
実施期間	平成30年11月8日から11月16日まで	
対象	3年生以上の児童 教職員（校長・副校長・担任・教科教員・教務主任）	
配付数	児童用 185件 教職員用 14件	児童用 330件 教職員用 19件
実施方法	配布した回答用紙への記載による	
回収数	児童用 181件 (98%) 教職員用 12件 (86%) 合計 193件 (97%)	児童用 322件 (98%) 教職員用 18件 (95%) 合計 340件 (97%)

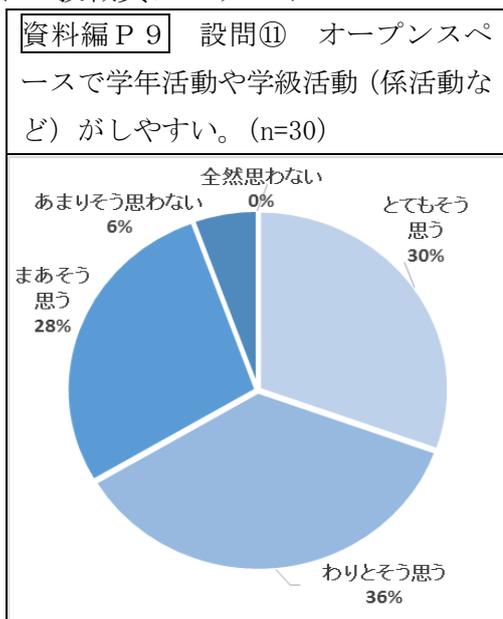
② アンケート結果でのオープンスペース型運営方式の成果

ア 児童アンケート



- ・ 2校ともにオープンスペースが活用できることや、開放的な空間に対して肯定的な回答が多かった。

イ 教職員アンケート



- ・「オープンスペースで学年活動や学級活動（係活動など）がしやすい」という設問に対し、「まあそう思う」以上の肯定的な回答が94%である。

前回報告に挙げた、ヒアリングで得られたメリットは、今回のアンケートでも挙げられている。

資料編 P 9 【教職員アンケート(共通)】より、 成果に関する設問（抜粋）	「まあそう思う」以上の割合	
	大谷口小学校	板橋第一小学校
児童同士がクラスを超えた学年としてのまとまりをもちやすい。	100%	84 %
教員同士の共通理解を図ることにより、学年での協力体制が作りやすく、学年経営が行いやすい。	83 %	83 %
オープンスペースで学年活動や学級活動（係活動など）がしやすい。	100 %	89 %
オープンスペースは自由度が高くアクティブラーニングに適している。	83 %	83 %
オープンスペースで学習用具や教材などが学年ごとに活用しやすい。	82 %	100%
指導の様子や児童の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。	67 %	63 %

- ・ オープンスペースは学年活動や学級活動、学級横断的な活動に際し、積極的に活用できる空間であることがわかる。

※【アンケート結果詳細については資料編参照】

3 オープンスペース型運営方式の課題

(1) 前回報告からの課題

前回報告で挙げた主な課題について、その後の状況については以下のとおりである。

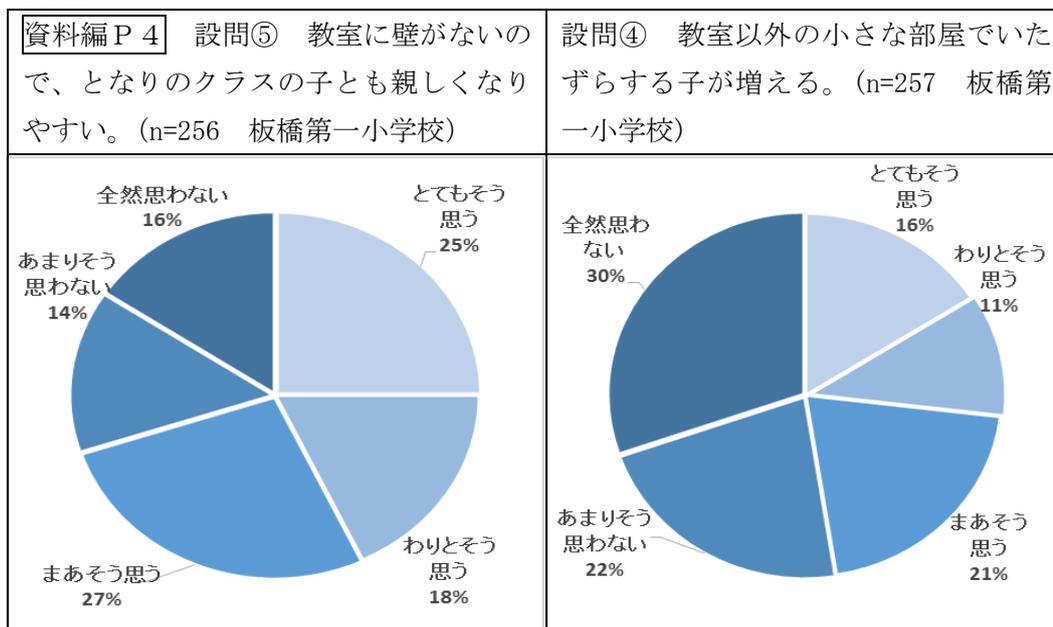
なお、大谷口小学校は平成26年度1、2年生の教室、27年度以降に3年生以上の教室に可動式間仕切りを設置している。板橋第一小学校は、平成27年度に間仕切りがなかった低学年教室に可動式間仕切りを設置している。

前回報告時（ヒアリング結果）	現在（アンケート結果）
【学校運営上】	
・常に見られているという緊張感が教員にとってストレスになることも考えられる。	・オープンにすることで、適度な緊張感のもと、授業ができています。
【施設面】	
・オープンスペース型運営方式であるため、教室内の壁が一面分少なくなり、掲示スペースが限られる。	・大谷口小学校も板橋第一小学校も可動式間仕切りを設置したため、掲示スペースの確保はできるようになった。
・オープンスペース型運営方式のため、冷暖房使用の範囲が広がり、効率が悪い。	(P 9、4-(3)参照)

※ 前回の報告時は板橋第一小学校へのヒアリング調査を基としたが、今回は大谷口小学校と板橋第一小学校の2校の調査結果を基にまとめている。

(2) アンケートから見た課題

① 児童アンケート

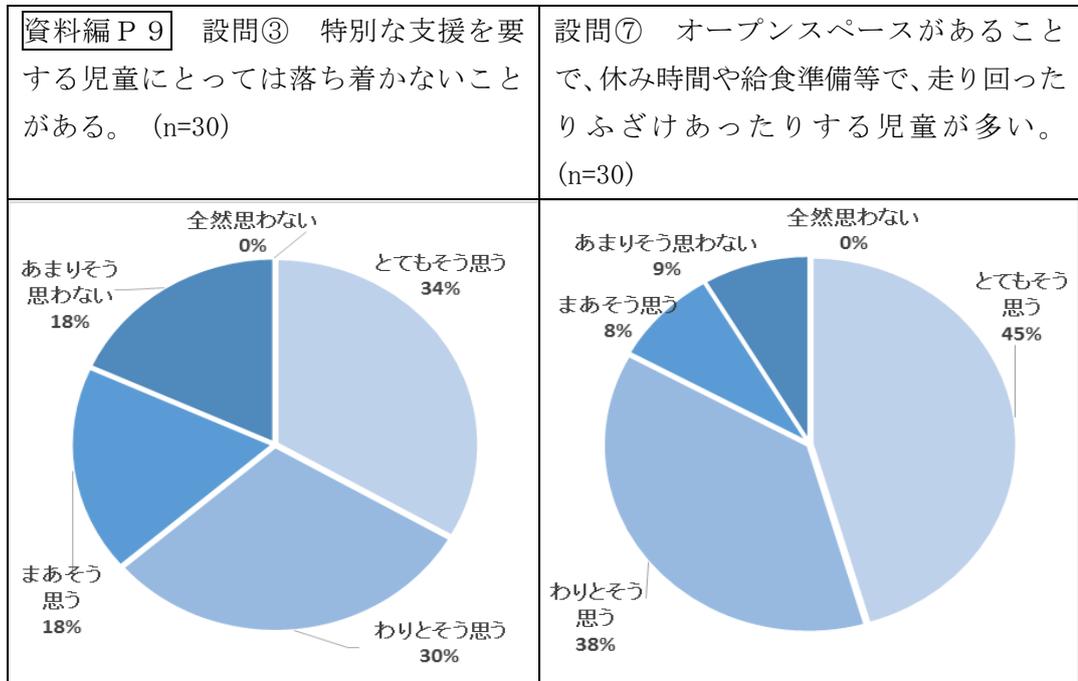


- ・「教室に壁がないので、となりのクラスの子とも親しくなりやすい」という設問に対し、「まあそう思う」以上の肯定的な回答が70%に及ぶ一方で、「教室以外の小さな部屋でいたずらする子が増える」設問に対し、「まあそう思う」以上の回答が48%である。

・大谷口小学校は教室の配置上(P 3の図参照) オープンスペース部分が通路となる「手前の教室」と、「奥の教室」が生じる。

「手前」「奥」に分けアンケート結果を見た場合、手前では「学校公開時などのにぎやかさが気になる」「廊下を挟んだ他の教室から声が聞こえて、勉強のじやまになる」、奥では「作業のしやすさ」など有利性を挙げる回答が多かった。

② 教職員アンケート



・「特別な支援を要する児童にとっては落ち着かないことがある」という設問に対し「まあそう思う」以上の回答が82%、「オープンスペースがあることで、休み時間や給食準備等で、走り回ったりふざけあったりする児童が多い」という設問には「まあそう思う」以上の回答が91%である。

(3) ヒアリング等による課題

改築当初は、オープンスペースを活用した新たな授業展開が、教育情報誌に取り上げられるなど、大変質の高い授業として実施された。

しかし、そのレベルの授業を恒常的に持続するには、設備・教材の準備、授業の準備、教材の選択・研究など、大きな負担が教職員にかかることとなり、継続が困難であることが確認された。これは、他自治体においても同様に見られる傾向である。

対応した課題

多様でダイナミックな授業展開ができる環境、学年や異学年交流の活発化、掲示スペースの確保、空調効率を上げるため、大谷口小学校、板橋第一小学校両校において、可動式間仕切りを設置。

4 施設面からの分析（改築前との比較）

（1）オープンスペース設置による延床面積の比較

延床面積は改築前と比較するとオープンスペースが新設される分増加している。その分、校庭の面積が縮小される結果となっている。

大谷口小学校	板橋第一小学校
864 m ² の増加 実面積は3,561 m ² の増加 (改築前後とも18学級として推計した値)	648 m ² の増加 実面積は3,577 m ² の増加 (改築前後とも18学級として推計した値)

※ 平均的な普通教室の面積：64 m²

※ 比較のため、18学級規模で建物を整備した場合の値に換算している

（2）オープンスペース設置による改築経費の比較

改築に要した経費を比較すると、オープンスペース設置による延床面積の増加に比例して増加している。

大谷口小学校	板橋第一小学校
約3.4億円の増加（18学級に換算） （改築経費総額は約25億円）	約2.6億円の増加（18学級に換算） （改築経費総額は約28億円）

※ 労務単価や建築資材費などの工事物価が建築年次により異なるため、平米単価39万3千円（税抜）として増加面積に乗じたものである（前回報告時は平米単価35万円にて試算）

※ 比較のため、18学級規模で建物を整備した場合の値に換算している

（3）電気・ガス使用量比較

電気・ガスの使用量については、小学校の平均との比較に加え、延床面積が7,000 m²以上で大規模でない学校、または6,400 m²以上（延床面積上位10校）のうち学級数が16～18である学校の、計4校（志村第六小学校、蓮根小学校、高島第二小学校、高島第六小学校）の平均と比較した。

① 電気使用量

大谷口小学校	平成21～29 (改築後平均)	小学校平均 (平成21～29)	4校平均 (平成21～29)
総使用量 (kWh)	251,079	189,183	213,498
延床あたり (kWh/m ²)	32.88	32.40	30.14

板橋第一小学校	平成21、22 (改築前平均)	小学校平均 (平成21、22)	4校平均 (平成21、22)	平成25～29 (改築後平均)	小学校平均 (平成25～29)	4校平均 (平成25～29)
総使用量 (kWh)	159,081	190,573	224,563	226,902	194,702	212,879
延床あたり (kWh/m ²)	19.05	32.64	31.70	27.17	33.35	30.05

※ 大谷口小学校は夜間施設開放（校庭）使用照明分を減算。

② ガス使用量

大谷口 小学校	平成 21～29 (改築後平均)	小学校平均 (平成 21～29)	4 校平均 (平成 21～29)
総使用量 (m^3)	40,172	14,793	17,574
延床あたり (m^3/m^2)	5.26	2.53	2.48

板橋第一 小学校	平成 21、22 (改築前平均)	小学校平均 (平成 21、22)	4 校平均 (平成 21、22)	平成 25～29 (改築後平均)	小学校平均 (平成 25～29)	4 校平均 (平成 25～29)
総使用量 (m^3)	11,870	14,993	19,767	24,963	14,643	15,863
延床あたり (m^3/m^2)	1.42	2.57	2.79	2.99	2.51	2.24

電気使用量について、大谷口小学校は改築前のデータがないが、小学校平均及び4校平均を上回っている。板橋第一小学校は、改築前は小学校平均、4校平均ともに下回っていたが、改築後は24時間換気装置の設置などにより総使用量で小学校平均、4校平均を上回った。ただし、面積あたりの使用量は小学校平均、4校平均を下回っており、延床面積の増加が総使用量の増加につながる要因になったといえる。

ガス使用量についても、大谷口小学校は小学校平均、4校平均を上回り、板橋第一小学校も、改築前は小学校平均、4校平均を下回っていたのが、改築後の平均では小学校平均、4校平均の数値を上回るようになっている。2校とも改築後の延床面積の増加、空調装置をガス方式としたことが、区の平均を上回る要因になっている。

5 オープンスペース型運営方式改築校の検証結果

- (1) オープンスペースは学年活動や学級活動など、各学級にとどまらず横断的に授業や活動を行う際、児童も教職員も積極的に活用することができるスペースとして有意義なものであることがうかがえる。
- (2) オープンスペース型運営方式を採用する学校においては、教室の配置により、オープンスペース型運営方式の効果が左右される状況となり、板橋第一小学校のような並列型の方が効果が高い結果となっている。施設整備に際しては教室とオープンスペースの位置や動線を踏まえて配置を行う必要が求められる。
- (3) 学力の向上についての改善は顕著に見られない。大谷口小学校では緩やかに上昇し、板橋第一小学校では年によりばらつきがみられる結果である。両校とも直近2年は区平均点に近い結果となっている。
- (4) 教室の壁をオープンにすることで適度な緊張度が作用する一方で、掲示スペースがなくなったり落ち着かない児童が出てしまうことなどから、オープンスペース型運営方式を取り入れた学校では、後付けで可動式の間仕切り等を取り付けている。
- (5) 電気・ガスの使用量は延床面積の増加に伴い増加しており、延床面積の増加が光熱費の負担増につながっている。また、延床面積の増加は施設維持管理の負担増にもつながっていると言える。

学年活動や学級活動などを横断的に行う際に積極的に活用できるなどオープンスペース型運営方式のメリットがある一方で、間仕切りの追加設置、電気・ガスの使用量増加などの課題も見えてきている。

児童数は依然として増加傾向にあり、児童数の増加時には普通教室または習熟度別少人数学習教室として使用し、あるいは隣接する教室との壁をスライド式等にして教室を繋げて学年集会などに使用するなどフレキシブルに使用できる多目的教室として整備していく方法も考えられる。

効率の良い柔軟性のある空間の創出により、延床面積の増加を抑え、ICT機器の充実にシフトすることによって将来の状況の変化にも対応し、教員の負担を軽減するとともに質の高い授業を展開し、持続可能なしつらえを目標とする方向が考えられる。

第3部 教科センター・教科教室型運営方式

1 教科センター方式実施校の状況

(1) 教科センター方式の導入

教科センター方式とは、国語、社会、数学、理科、英語などの授業を専用の教科教室で行い、関連する教科教室と多目的スペース（メディアスペースという）・教科教員室・教材室などを組み合わせた教科ごとのエリア（教科センター）を構成する方式である。

生徒はホームベースと呼ばれる（赤塚第二中学校ではホームルームと呼称している）、生徒の活動拠点となる、学級活動ができる部屋を拠点とし、授業に必要な学習用具を持って各教科教室に移動して授業を受ける。

各教科教室に移動して授業を受ける教科教室型運営方式に加え、関連する教科教室とメディアスペース・教科教員室・教材室などを組み合わせて教科センターを構成する設備的な計画を当初から踏まえて建築された形である。

赤塚第二中学校、中台中学校は、教科センター方式での学校運営が可能な施設として整備した。

赤塚第二中学校は各教室とは別にベンチやテーブル、ロッカーを備えるホームベースがある（ホームベース独立型）。中台中学校は、教科教室をクラスの拠点として割り当て、教室の机や椅子をベンチやテーブルと兼用し、ロッカーのある部屋を併設している（ホームベース併設型）。

メディアスペース設置のねらいとして、教科や単元に関する教材・図書・学習成果物などを掲示・展示し、教科の特色や学習単元の内容に応じた学習環境づくりや、教科の魅力や学習のねらいを生徒が感じ、学習への能動的な意識や意欲的な態度が育つこと、学校や各教科が取り組む教育を「見える化」し、互いに高め合う学校風土を生み出すなどが挙げられている。

なお、現在改築中の上板橋第二中学校も中台中学校と同様なホームベース併設型の教科センター方式によって整備を進めている。

(2) 基礎資料

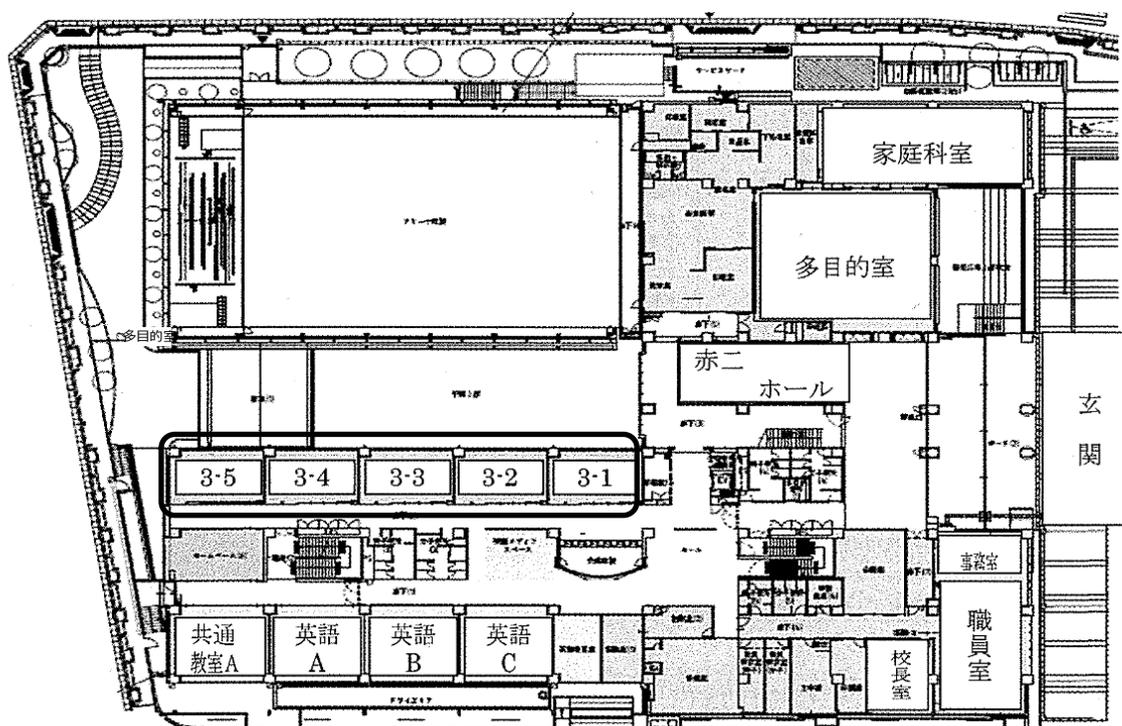
①赤塚第二中学校【ホームベース独立型の教科センター方式】

- ・改築年度 平成 24 年度 ・新校舎使用開始 平成 25 年 4 月～
- ・学校規模 校地面積：15,204 m²、延床面積：9,930 m²、校庭面積：7,340 m²
- ・改築前後の生徒数・学級数推移

年 度	平成 22 (改築前)	～	平成 25 (改築後)	平成 26	平成 27	平成 28	平成 29	平成 30	令和 元
生徒数	439		519	565	546	561	514	516	511
学級数	12		14	15	15	15	14	14	14

- ・各学級は朝の会や道徳の授業、給食時はホームルームで行い、その他は各教科教室へ生徒が移動している。

図：赤塚第二中学校校舎平面図



ホームルーム

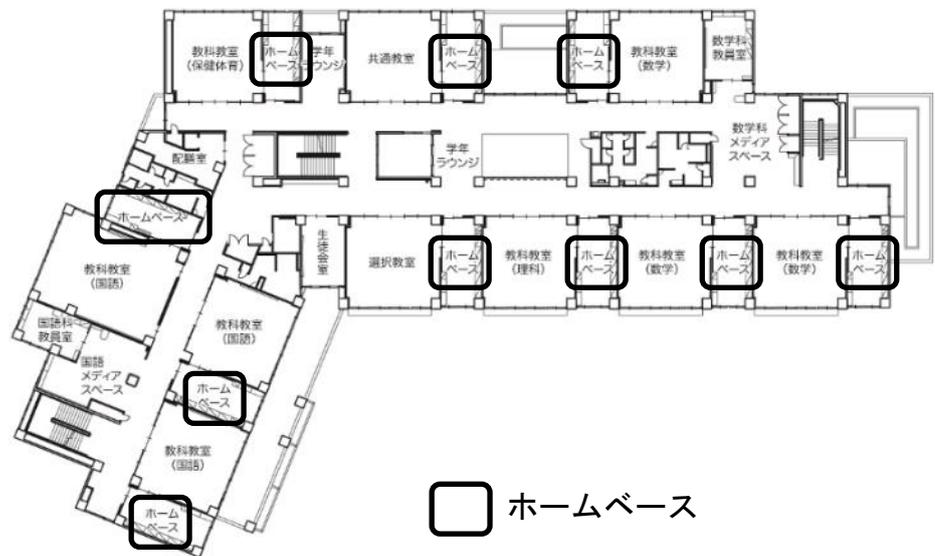
②中台中学校【ホームベース併設型の教科センター方式】

- ・改築年度 平成 27 年度 ・新校舎使用開始 平成 28 年 4 月～
- ・学校規模 校地面積：11,366 m²、延床面積：9,999 m²、校庭面積 4,445 m²
- ・改築前後の生徒数・学級数推移

年 度	平成 25 (改築前)	平成 26	平成 27	平成 28 (改築後)	平成 29	平成 30	令和 元
生徒数	256	280	269	355	415	449	497
学級数	7	8	8	11	12	14	14

- ・各学級は朝の会や道徳の授業・給食はホームベースに隣接する教科教室で行っている。

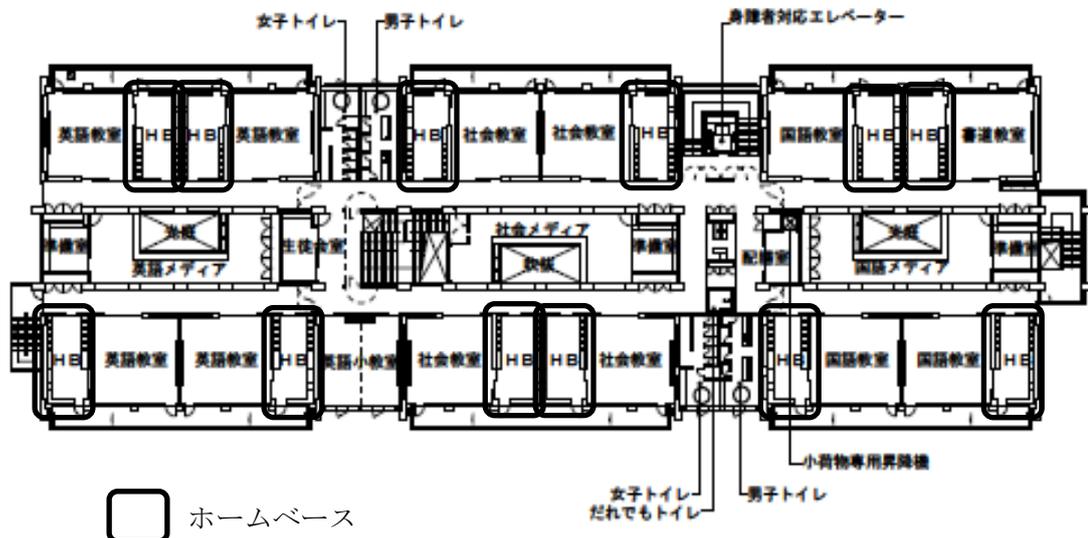
図：中台中学校校舎平面図



③（参考）改築後の上板橋第二中学校【ホームベース併設型の教科センター方式】

上板橋第二中学校は、ホームベース併設型の教科センター方式を改築に際し導入する予定である。

図：改築後の上板橋第二中学校の校舎平面図（4階部分抜粋）



2 教科センター方式の成果に関する調査

(1) 学力の向上

学力の向上については、毎年4月に中学校3年生対象に実施される「全国学力・学習状況調査」の平成25年度から30年度の6年間の結果を基に検証した。

平成24年度に改築を行った赤塚第二中学校では、改築翌年度の平成25年度から区平均よりも徐々に上昇し始め、平成30年度には国語・数学ともに全国の平均はもちろん東京都の平均（国語A：77点、国語B：63点、数学A：67点、数学B：49点、理科：65点）も大きく上回った。

平成27年度に改築を行った中台中学校では、平成26年度までは国語・数学ともに区平均を下回っていたが、改築翌年度の平成27年度には、全教科で区平均（国語A：75点、国語B 65点、数学A：63点、数学B：40点、理科：50点）を上回り、その後は、区平均前後という結果を維持している。

両校とも教科センター方式の導入に当たり、ICT機器の導入や、大学との連携により、教員を派遣して授業改善に取り組みを続けてきた結果が効果をもたらしたといえる。

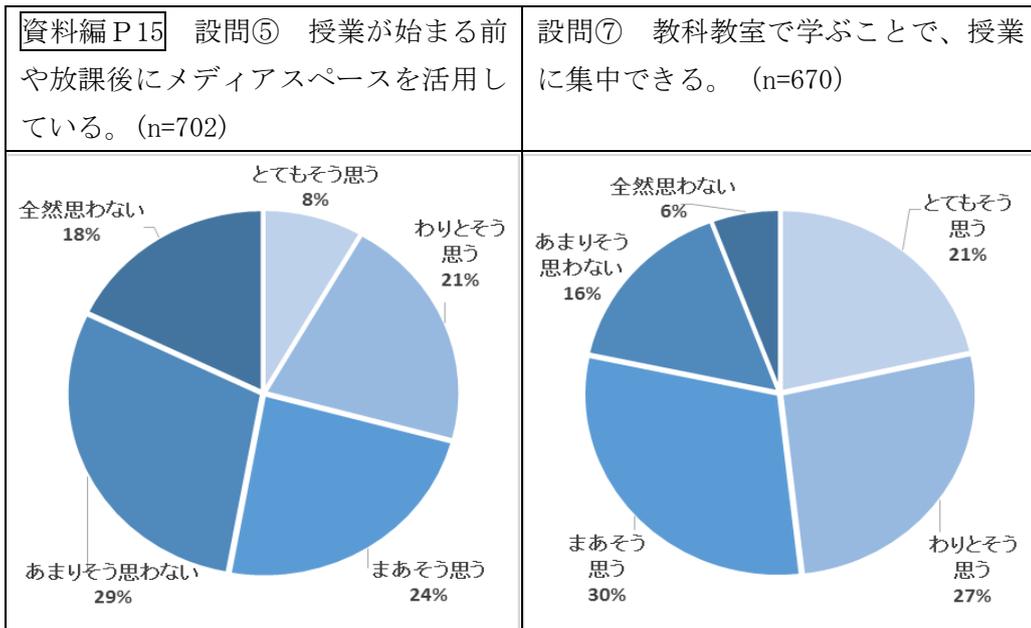
(2) 生徒・保護者・教職員アンケート

① アンケート調査の概要

学 校 名	赤塚第二中学校	中台中学校
実施期間	平成30年11月21日から12月14日まで	
対 象	全生徒・保護者・教職員（校長・副校長・担任・教科教員・教務主任）	
配 付 数	生徒用、保護者用 各 518 枚 教 職 員 用 27 枚	生徒用、保護者用 各 448 枚 教 職 員 用 34 枚
実施方法	配布した回答用紙への記載による	
回 収 数	生 徒 用 328 枚 (64%) 保 護 者 用 329 枚 (64%) 教 職 員 用 16 枚 (59%) 全 体 673 枚 (63%)	生 徒 用 410 枚 (92%) 保 護 者 用 132 枚 (29%) 教 職 員 用 20 枚 (59%) 全 体 562 枚 (60%)

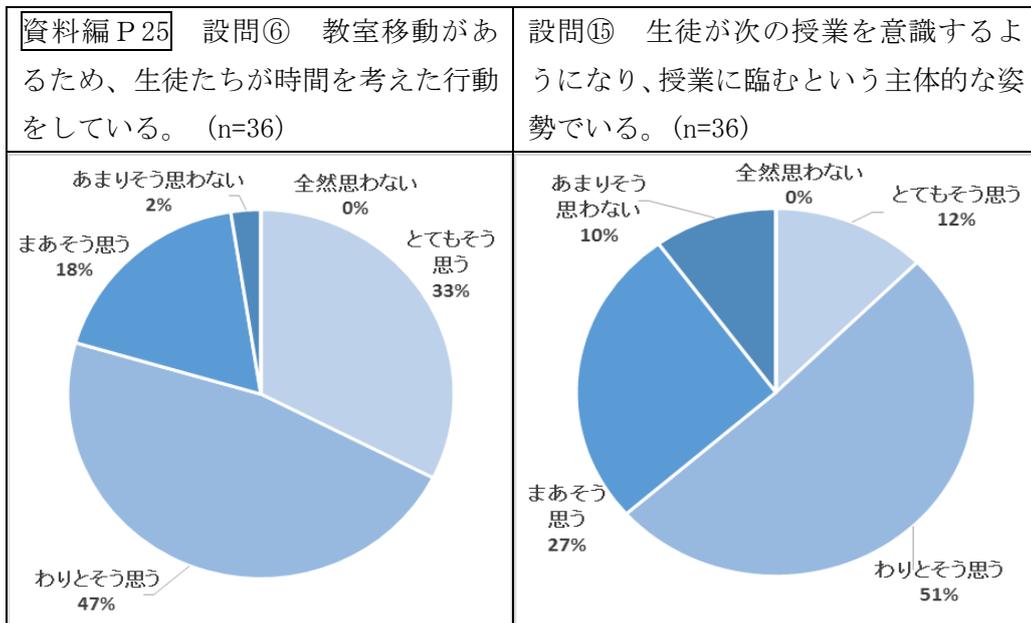
② アンケートから見る教科センター方式の効果

ア 生徒アンケート



- ・「授業前や放課後にメディアスペースを活用している」という設問に対し、「まあそう思う」以上の回答をした生徒が53%である。
- ・メディアスペースの活用については、自習時や友達と話すときの利用、本や資料を読む際の活用などの回答が多くみられた。
- ・「教科教室で学ぶことで、授業に集中できる」に「まあそう思う」以上の回答が78%である。
- ・「時間を意識して行動できる」という設問に対しては、「まあそう思う」以上の回答が98%である。
- ・教科センター方式の良いところを述べる設問に対し、「毎時間教室と教員が替わるので気持ちを切り替え授業に臨める」「先輩・後輩との交流が生まれる」などの意見があった。

イ 教職員アンケート



- ・教職員へのアンケートでも、生徒の「授業に対する姿勢」や、「時間」への意識について、教科センター方式がよい影響を及ぼしているとする回答が、ともに90%以上であった。

前回報告に挙げた教科センター方式のメリットについては、今回のアンケートでも挙げられている。

資料編P25-26【教職員アンケート】より、 成果に関する設問（抜粋）	「まあそう思う」以上の割合	
	赤塚第二中学校	中台中学校
教科教室への移動の際に、異学年と動線が交差することがあるが、先輩・後輩の関係に起因する問題は発生していない。	100%	100%
教科教室の隣に教科教員室があるので、教材管理がしやすい。	93 %	95 %
教科教員室がベテラン教員から若手教員への指導の場となっている。	47 %	69 %
教科教室があることにより、日々の時間割の中での授業準備にかかる時間が減少した。	71 %	65 %
生徒が次の授業を意識するようになり、授業に臨むという主体的な姿勢でいる。	100%	80 %
廊下から教室内が見える設計なので、生徒も見られているという意識から、適度な緊張感を持って授業を受けている。	93 %	60 %
指導の様子や生徒の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。	47 %	95 %

- ・アンケート全体を通じて、教科センター方式の成果に対して肯定的な回答が多かった。
- ・授業毎の教科教室への移動を通して、生徒達の主体的な姿勢が見られる。
- ・多くの項目で、過半数の肯定的な回答があったものの、「教科教員室がベテラン教員から若手教員への指導の場となっている。」の項目については、2校で差が生じている。
- ・「外から見られる」ことに関する好影響については2校で大きく差がある。
- ・アンケート内では、同じ教科を隣接した教室で行うため、授業を行う視点では他教職員の授業を間近で見られ、教材研究や指導方法の参考になるという意見も見られた。

ウ 保護者アンケート

- ・気持ちの切り替えや時間の管理意識の醸成に寄与しているとの回答が複数あった。また、自由意見として、生徒が授業ごとに多くの教材や荷物を持って移動することの負担を懸念する声もみられた。（資料編P19～21 参照）

3 教科センター方式の課題

(1) 前回報告からの課題

前回報告で挙げた主な課題について、その後の状況については以下のとおりである。

前回報告時	今回
【学校運営上】	
<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間の移動により、落ち着かない生徒が出てくる。ADHD（注意欠陥多動性障害）などの環境変化に敏感な生徒は適応できず、大声を上げたり、教室を飛び出したりしてしまうことが懸念される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回も課題として残っている。授業に際し生徒達が落ち着くまで時間がかかるとの意見があった。新1年生や、環境の変化に敏感な生徒への指導が必要である。
<ul style="list-style-type: none"> ・教室移動の時間に全生徒が行き来するので、インフルエンザなど感染性の病気が一斉に拡大する危険がある。感染性の病気が流行すると感染率は高くなると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回報告でのヒアリングに際し、施設面のデメリットとして「毎時間全生徒が行き来するので、インフルエンザなどの感染症拡大」を懸念する意見があった。過去のインフルエンザ様疾患による臨時休校措置（学級閉鎖等）の記録（資料編P28参照）からは、校舎仕様の違いによる感染症流行との関係性は認められない。
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームルームの稼働率が低い。生徒が授業を受けている間は、ホームルームはほとんど使用されていない（赤塚第二中学校）。 ・学級への帰属意識が薄くなると思われる。毎時間教科教室で過ごすことから、自分の学級という意識が薄くなる。自分の学級、自分の机という愛着も減少していると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2校とも朝や帰りの会、道徳の授業、給食時間、総合的学習の時間等に、ホームベースは使用されている。
<ul style="list-style-type: none"> ・教科センター方式は、移動面の課題もあり、教科センター方式を活かした探究的な学習を行うには、学年4学級くらいまでだと思う。 	<p>(P20、3-(3)参照)</p>
【施設面】	
<ul style="list-style-type: none"> ・共通教室（赤塚第二中学校では「多目的室」）が少ない。現在共通教室が3室あるが、英語・数学で習熟度別少人数学習を行うには、教室が不足する。英語・数学を同時に実施するためには、共通教室が4室必要となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数指導以外にも、学年単位での活動に際し教室配慮が必要になるので、多目的室のような余裕教室があると便利という意見がある。少人数学習を展開する際にホームルーム教室も活用し、対応する方法がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・冷暖房の必要頻度が高くなるため光熱費が多くなる。 	<p>(P21、4-(3)参照)</p>

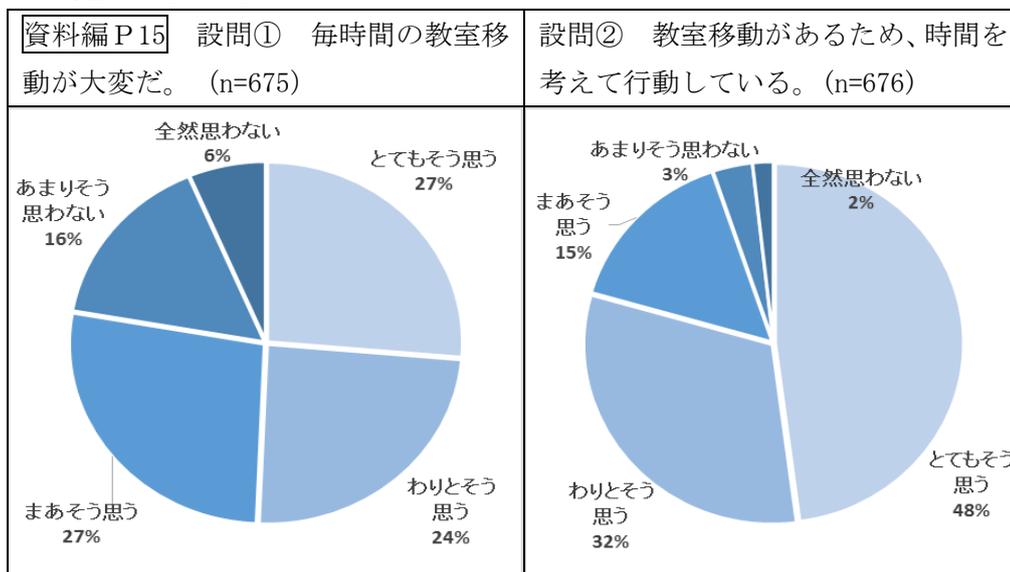
また、今回の教職員アンケートでは、学級の帰属意識の低下を懸念する意見も、次のとおりみられた。

資料編P26【教職員アンケート】より、 学級の帰属意識に関する質問	「まあそう思う」以上の割合	
	赤塚第二中学校	中台中学校
生徒に自分の学級、自分の机という意識があまりないと感じる。	67%	65%

- ・生徒へのアンケート調査での「どんなときにまとまりを感じるか」という記述式設問に対し、行事の時も、普段でも教室移動の際に声を掛け合うことでクラスとしてのまとまりを感じるという意見があり、授業時にクラス内での話し合いや、グループ活動の時にもまとまりを感じるという意見が多い。

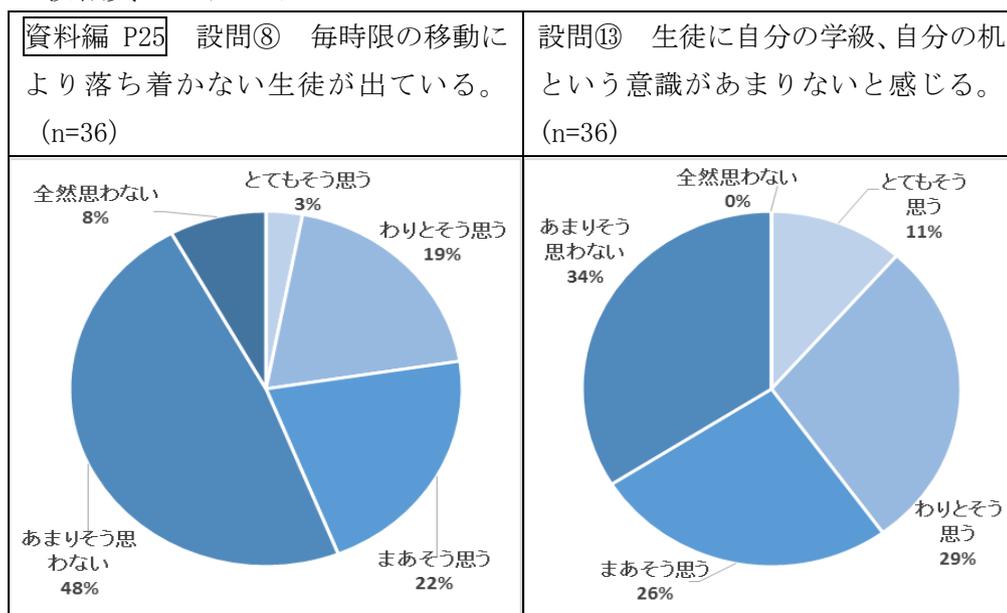
(2) アンケートから見た課題

ア 生徒アンケート



- ・「毎時間の教室移動が大変だ」という設問に対し「まあそう思う」以上の回答が77%である。
- 一方で、「教室移動があるため、時間を考えて行動している」という設問には、「まあそう思う」以上の回答が95%である。
- ・移動に関する課題が多く挙げられた。特に、赤塚第二中学校の場合は1～4時間目までの荷物を全て持って移動することに負担を感じている回答が多い。
- ・中台中学校では、授業ごとに荷物を運ぶため負担感は低い、「休み時間が少ない」、「教室移動の時間にゆとりをもたせてほしい」といった意見が見られた。

イ 教職員アンケート



- ・「毎時限の移動により落ち着かない生徒が出ている」という設問に対し「まあそう思う」以上の回答は44%である。
また、「生徒に自分の学級、自分の机という意識があまりないと感じる」という設問に対しては「まあそう思う」以上の回答は66%であった。
- ・教室の移動が必要なため、次の授業開始に際し、落ち着くのに時間がかかることや、毎時間違う教室での授業のため、クラスへの帰属意識が醸成されにくいという回答があった。
- ・「前授業の遅延が次の授業へ影響を及ぼす」ことへの懸念、「教科センター方式により、学校全体での連携がより重要」になることや、「学級数増加が課題を増やす」という意見も見られた。

資料編 P23 【教職員アンケート】より、設問⑭職員室と教科教員室の在席割合について	
赤塚第二中学校 (15人平均)	中台中学校 (19人平均)
1日を100%とした場合、 職員室 80% : 教科教員室 10% : その他 10%	1日を100%とした場合、 職員室 57% : 教科教員室 36% : その他 7%

- ・赤塚第二中学校と中台中学校の教職員が職員室と教科教員室に在席する割合を調査したところ職員室の在席割合の方が高く、教科教員室の在籍割合が低かった。赤塚第二中学校では、生活指導の観点から、教員が職員室に戻るようシフトしている。中台中学校は、教科の情報交換は教科教員室で、学年・学級の情報交換は職員室でという使い分けをしている結果である。

※【アンケート結果詳細については資料編参照】

(3) ヒアリング等による課題

学級増への対応について、前回報告時のヒアリングでは、教科センター方式の継続には、施設的に教科センター内の教科教室の数が限られていることもあり、各学年4クラス程度までが望ましいとの意見があった。

今回改めて2校にヒアリングしたところ、赤塚第二中学校・中台中学校どちらも5クラスの学年があり、現状教科センター方式の継続をしているものの、学級数の増加により教科教室の不足、ホームベースの不足が予想される。特に、教科教室が各教科3教室である赤塚第二中学校は、教員が配置されても教室が足りない事態を招く恐れがある（中台中、現在改築中の上板橋第二中学校は、各教科教室が4教室である。）。このまま学級数の増が続くと教科センター内の教科教室が足りなくなり、教科センターそのものが維持できなくなる懸念が発生している。

教科センター方式は、各時間生徒が全員移動するため、生徒の所在が掴みにくく、教職員は担任であるなしに関わらず全生徒の動向に配慮する必要があり、従来の方式に比較して負担が大きいとのことである。

これらの理由から、学級増が続いていくと教科センター方式の継続が難しくなるという意見があげられている。

4 施設面から見た分析概要（改築前との比較）

（1）教科センター方式設置による延床面積の比較

延床面積は改築前と比較すると教科センター部分が増加している。
その分、校庭の面積が縮小される結果となっている。

赤塚第二中学校	中台中学校
1,321 m ² の増加 実面積は1,584 m ² の増加 (改築前後とも18学級として推計した値)	1,075 m ² の増加 実面積は2,032 m ² の増加 (改築前後とも18学級として推計した値)

※ 平均的な普通教室の面積：64 m²

※ 比較のため、18学級規模で建物を整備した場合の値に換算している

（2）教科センター方式設置による改築経費の比較

改築に要した経費も増加している。

赤塚第二中学校	中台中学校
約5.2億円の増加（18学級に換算） (改築経費総額は約41億円)	約4.2億円の増加（18学級に換算） (改築経費総額は約37億円)

※ 労務単価や建築資材費などの工事物価が建築年次により異なるため、平米単価39万3千円（税抜）として増加面積に乗じたものである（前回報告時は平米単価35万円にて試算）

※ 比較のため、18学級規模で建物を整備した場合の値に換算している

（3）電気・ガス使用量比較

電気・ガスの使用量については、中学校の平均との比較に加え、延床面積が9,000 m²以上または同程度の学級数（14学級以上）の学校6校（板橋第三中学校、志村第一中学校、志村第四中学校、赤塚第一中学校、赤塚第三中学校）の平均と比較した。

① 電気使用量

赤塚第二中学校	平成21、22 (改築前平均)	中学校平均 (平成21、22)	6校平均 (平成21、22)	平成25～29 (改築後平均)	中学校平均 (平成25～29)	6校平均 (平成25～29)
総使用量 (kWh)	229,986	221,927	283,199	422,782	234,012	272,891
延床あたり (kWh/m ²)	23.16	26.37	30.73	42.58	27.81	29.61
中台中学校	平成21～25 (改築前平均)	中学校平均 (平成21～25)	6校平均 (平成21～25)	平成28・29 (改築後平均)	中学校平均 (平成28～29)	6校平均 (平成28～29)
総使用量 (kWh)	195,257	217,604	270,465	249,321	240,534	273,004
延床あたり (kWh/m ²)	19.53	25.86	29.35	24.93	28.58	29.63

※ 赤塚第二中学校は夜間施設開放（校庭）使用照明分を減算。

② ガス使用量

赤塚第二 中学校	平成 21、22 (改築前平均)	中学校平均 (平成 21, 22)	6 校平均 (平成 21, 22)	平成 25～29 (改築後平均)	中学校平均 (平成 25～29)	6 校平均 (平成 25～29)
総使用量 (m^3)	15,072	17,710	26,054	46,260	21,089	33,563
延床あたり (m^3/m^2)	1.52	2.10	2.83	4.66	2.51	3.64

中台 中学校	平成 21～25 (改築前平均)	中学校平均 (平成 21～25)	6 校平均 (平成 21～25)	平成 28・29 (改築後平均)	中学校平均 (平成 28～29)	6 校平均 (平成 28～29)
総使用量 (m^3)	13,179	18,483	29,502	34,128	22,565	35,600
延床あたり (m^3/m^2)	1.32	2.20	3.20	3.41	2.68	3.86

電気使用量は、2校とも24時間換気装置の設置などにより改築後に増えているが、赤塚第二中学校は中学校平均使用量及び6校平均使用量を大きく上回り、中台中学校については延床あたりの使用量は中学校平均、6校平均を下回っている。

赤塚第二中学校の電気使用量は、共有部分まで含めた空調の導入、ホームルーム分の空調、加湿器の設置により総使用量が増えている。一方中台中学校は、省エネ機器の導入により、電気量を抑えることができている。

2校とも改築後に空調装置をガス方式としている。ガス使用量について、赤塚第二中学校では、総使用量、延床あたりの使用量ともに中学校平均値、6校平均を上回っている。中台中学校では総使用量、延床あたりの使用量ともに中学校平均を上回ったが、6校平均を下回った。

5 教科教室型運営方式実施校の現状と課題

(1) 教科教室型運営方式

教科教室型とは、基本的にすべての授業が教科ごとの専用教室で実施され、必要に応じてホームベース等が設置されている学校運営方式である。板橋区では、従来仕様の校舎でクラスごとに教科教室を割り当て、授業に際して生徒が教科教室に移動して授業を受ける方式を、板橋第五中学校が採用している。

なお、板橋第五中学校は普通教室をホームベースとして使用している。

教科センター方式も教科教室型の一様である。教科センター方式は教科教室型に加えて多目的スペース（メディアスペース）・教科教員室・教材室などを組み合わせた教科センターを構成するものである。

平成23年度に改築した板橋第三中学校では、普通教室に加え、英語と数学を少人数指導で行うために、特別活動室を使用し少人数指導を実施している。

さらに、改築中の上板橋第二中学校では、中台中学校と同様のホームベース併設型の教科センター方式が運営できる造りとする予定であるが、現校舎では学級に割り当てていない教室を利用して一部教科（英語・社会科）で教科教室型の学校運営を行っている。

前回報告では、板橋第三中学校、板橋第五中学校、旧向原中学校（現上板橋第二中学校へ統合）の3校でこれらの方式を導入しており、今後、教科センター方式と併せて導入の検討が必要な学校運営方式として挙げた。現在、ほとんどの中学校で、普通教室を使用した習熟度別少人数指導を実施（該当する教科は学校により違いあり）しているが、今回、教科センター方式に類似する学校運営形態の一つとして、一部教科教室型ともいえる習熟度別少人数指導用の特別活動室を改築に際して設置した板橋第三中学校、教科教室型を実施している板橋第五中学校、教科教室型を実施していた旧向原中学校とその流れを一部引き継いだ現上板橋第二中学校3校についても、比較検証を行った。

(2) 基礎資料

板橋第五中学校では既存の校舎を活用し、教科教室を整備し活用している。また、上板橋第二中学校については、統合前の向原中学校では板橋第五中学校同様の取り組みをしており、現在は習熟度別少人数指導用の教室を英語と社会科で設け実施している。

① 板橋第五中学校【教科教室型運営方式】

- ・ 建築年 昭和 37 年度
- ・ 学校規模 校地面積：11,529 m²、延床面積：5,708 m²、校庭面積 7,076 m²
- ・ 過去 5 年の生徒数・学級数推移

年 度	平成 26	平成 27	平成 28	平成 29	平成 30	令和元
生徒数	92	79	79	104	135	123
学級数	4	4	4	4	5	5

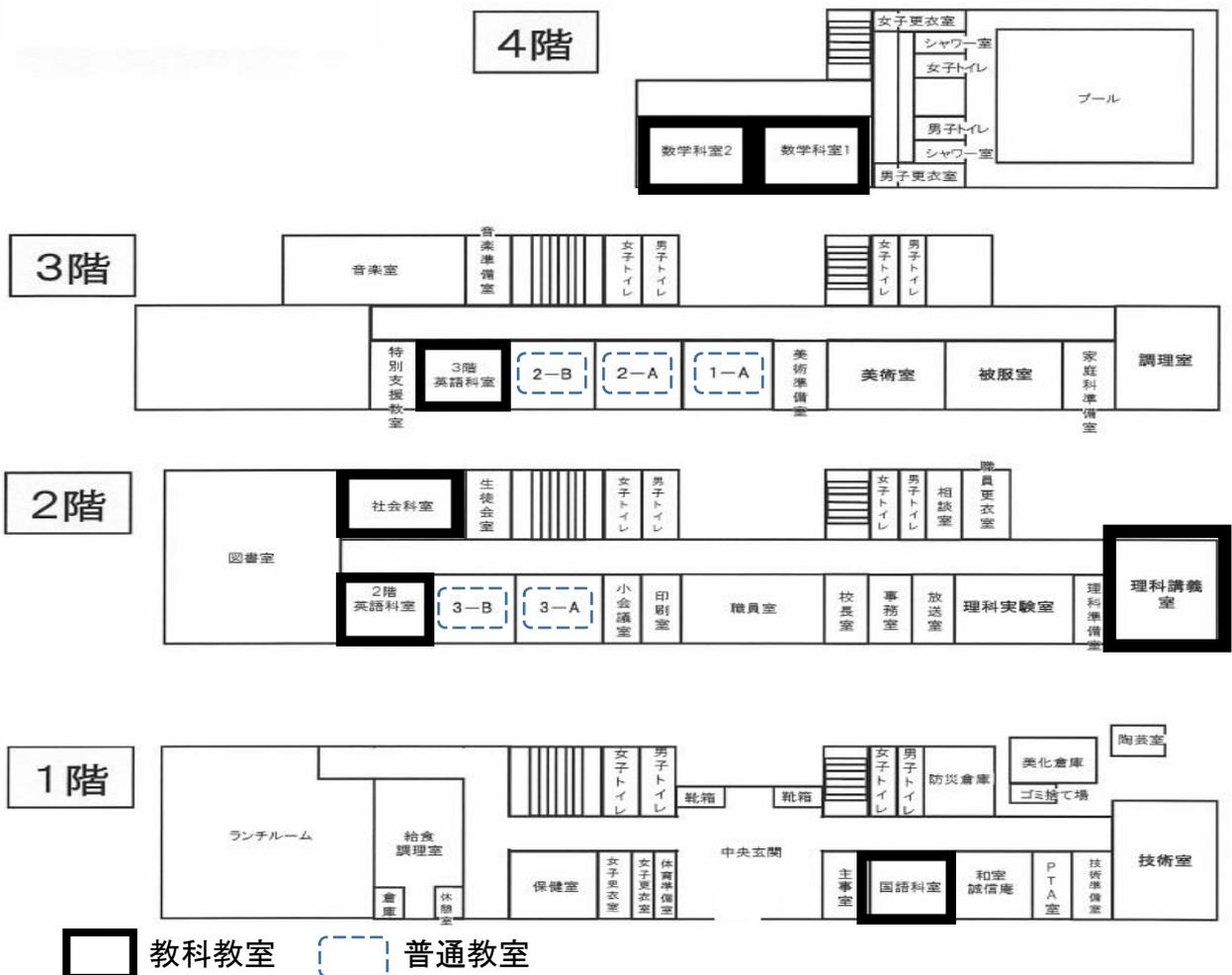
・ 現状

平成 26 年度から学級に割り当てていない教室を活用し、すべての授業を教科教室で実施している。

生徒も次の授業を意識して教室移動をすることで、授業に取り組む意識づけがなされ、主体的に学ぶ姿勢が成長する環境にある。対して、学活などのクラス単位での時間はホームルームで行うため、生徒たちの帰属意識も強い。

教職員にとっても、教科教室内で教材の保管ができることから、授業準備時間減少や、作業の効率化が可能である。

図：板橋第五中学校校舎平面図



② 上板橋第二中学校【一部教科教室型運営方式】

- ・ 建築年 昭和 36 年度
- ・ 学校規模 校地面積 9,925 m²、延床面積：7,516 m²、校庭面積 4,759 m²
- ・ 過去 5 年の生徒数・学級数推移

年 度	平成 26	平成 27	平成 28	平成 29	平成 30 ※	令和元
生徒数	283	260	240	240	294	290
学級数	9	8	8	7	9	9

※ 平成 30 年度から上板橋第二中学校と向原中学校が統合した

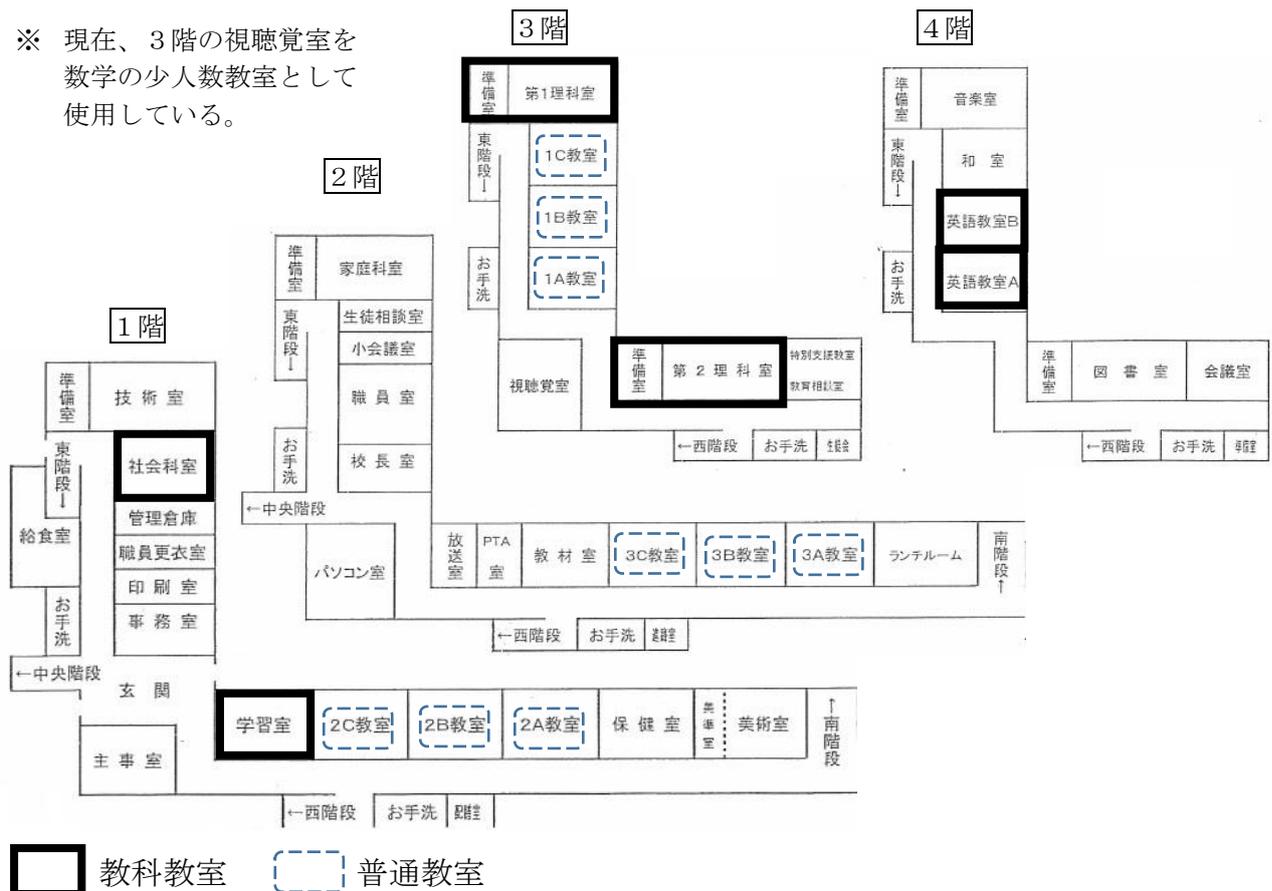
・ 現状

平成 30 年度に向原中学校と統合し、改築・移転を予定している。現在、一部の教室を教科教室型の少人数指導の場として活用している。

平成 31 年度以降には教科教室を設ける科目を増やし、改築・移転後に教科センター方式への円滑な移行ができるよう、準備を進めている段階である。

図：上板橋第二中学校校舎平面図

※ 現在、3階の視聴覚室を数学の少人数教室として使用している。



③ 板橋第三中学校【一部教科教室型運営方式】

板橋第三中学校では、校舎の改築に際し、あらかじめ教科教室としての部屋を含めて整備することにより、教科教室を運用している。

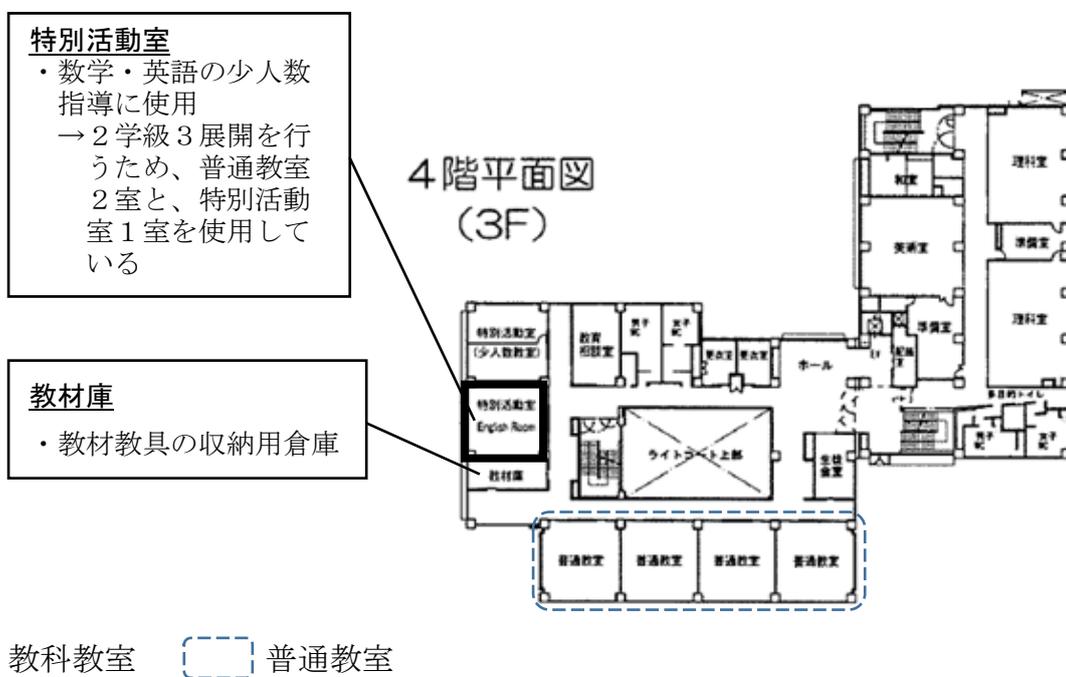
- ・改築年度 平成 23 年度 ・新校舎使用開始 平成 24 年 4 月～
- ・学校規模 校地面積：14,361 m²、延床：9,619 m²、校庭 5,636 m²
- ・改築前後及び過去 5 年の生徒数・学級数推移

年 度	平成 20 (改築 前)	～	平成 23 (改築 後)	～	平成 26	平成 27	平成 28	平成 29	平成 30
生徒数	303		147		282	332	339	356	370
学級数	8		6		8	9	9	10	11

・現状

改築当初から特別活動室を活用し、英語と数学で少人数指導を実施している。特に、英語の少人数指導では、特別活動室を「English room」として運用し、辞書の常備や英語の掲示、電子黒板の活用によって学習環境を整備している。各階にある特別活動室は普通教室仕様である。教室の配置は「回廊式」になっており、教室間移動が比較的容易である。どの普通教室からも特別活動室へ移動しやすく、多様な学習形態に対応できる造りである。

図：板橋第三中学校の部屋の活用状況



6 教科教室型運営方式による成果に関する調査（学力学習状況調査結果より）

・板橋第五中学校

全ての教科で教科教室を設けて授業を行うようにした平成26年度以降、年々結果が向上しており、平成30年度以降は全教科で全国平均正答率を上回り、区内でも上位校のひとつとなっている。

・上板橋第二中学校（旧向原中学校）

旧向原中学校は全教科で教科教室を導入していたが、区平均を下回っていた。

平成30年度に両校が統合し、平成31年度（令和元年度）以降一部の教科（英語・社会）で教科教室を設けている。区平均を若干上回っている。

・板橋第三中学校

区平均を下回っていたが、徐々に上昇し平成31年度は区平均に至っている。

7 教科センター方式改築校及び教科教室型運営方式の検証結果

（1）教科センター方式

- ① 学力の向上については、赤塚第二中学校においては区平均、全国・都も上回っている。中台中学校においては区平均を下回っていたが改築後区平均を上回り、その後は区平均前後を維持する状況と、両校とも概して良好な結果を得ている。
- ② 毎時間の教科教室への移動に対する負担についての懸念が寄せられると同時に、この移動が生徒の授業に臨む意識づけに有効という意見もあった。教職員アンケートからは、生徒の授業に対する意欲向上に、教科センター方式が有効に機能していることがうかがえる。
- ③ 今回の検証で得た具体的なメディアスペースの利用方法や、教科教員室の使用頻度を踏まえると、延床面積の増加が改築経費や電気・ガス使用量の増加につながっていることもあり、新たな学校づくりに際して再考が必要といえる。
- ④ 教科センター方式実施校は、生徒増による学級数の増加がみられており、このまま学級数の増が続くと教科センター内の教科教室が足りなくなり、教科センターそのものが維持できなくなる懸念が発生している。

（2）教科教室型運営方式

- ① 従来型校舎で一部または全部教科教室型の運営を行っている学校でも、教科教室への移動をとおし、時間を意識した学校生活を身に付けている。
- ② 赤塚第二中学校でホームベースとして使用している各教室については、生徒が各教科教室にて学習している時間は使用されていないという状態がみられ、中台中学校のように、ホームベースをロッカーのみにして教科教室に隣接している形式は、スペースの有効活用が図られ、限りあるスペースで有効な効果を引き出すことができる形と考えられる。

教科教室型運営方式の学校も教科教室がホームベースを兼ねるのでスペースの有効活用が図られていると言える。

教科センター方式、教科教室型運営方式に共通して、教科教室の設置が、教職員による教科指導の充実を図り、生徒が時間を意識し、自らの考えによって教科教室へ移動し、授業に参加する意欲を生み出し、主体的、能動的な学習への動機づけ、意識、態度へとつながっているものと考えられる。

板橋第三中学校を例に挙げると、英語・数学で少人数指導を実施しており、従来の特別教室と合わせると、割り当てられた教室で受ける授業は、国語、社会、道徳、総合的な学習の時間程度となっており、ほとんど教科教室型運営方式と同じような形態であると言える。

また、全国学力・学習状況調査の結果も板橋第三中学校・上板橋第二中学校ともに区平均まで上がってきており、板橋第五中学校は全教科で全国平均を上回るなど、各校とも上向いている。

これらを踏まえると、現在、英語・数学の少人数教室として活用している「特別活動室」を例とした「多目的に使える空間(教室)」を、各普通教室の近くに配置し、タブレットPC・電子黒板の充実や無線LAN環境の拡大、デジタル教科書の教科数増など必要に応じてICT機器を活用しながら教科教室の機能を持たせることで、教科センター方式の効果を得ることができるものと考えられる。

第4部 まとめ

1 オープンスペース型運営方式について

小学校の改築期にあわせたオープンスペース型運営方式の導入から6年が経過した。この間の運営状況、アンケートの結果などから、オープンスペースは学年活動や学級活動など、各学級にとどまらず学年としての授業や活動を行う際、児童も教職員も積極的に活用することができるスペースとして有意義なものであることがうかがえた。

また、多様な授業が展開でき、継続が可能であれば大変質の高い授業が実現できるなど、一定の成果があることが分かった。

その一方で、導入当初は、オープンスペースと普通教室を一体的に活用できるよう、扉を設けなかったが、実際は、授業を行っていく中で生じる空間の分離の必要性から、2つの導入校で後付けの間仕切りを設置するなどの改善を行う必要も見られた。

また、アンケート結果から、「休み時間等で、スペースがあるため走る子どもが多い」、「特別な支援を必要とする児童にとっては落ち着かないことがある」など、学校運営上の課題となり得る回答が、2校に共通して見られた。

これらの背景を踏まえると、小学校では多目的に使える空間（教室）を設け、教室の壁を可動式の間仕切り等の仕様にし、使用目的により大きな空間（オープンスペース）と仕切られた小さな空間（教室）を効率よく生み出しフレキシブルに活用する方法などが考えられる。

将来の授業内容・方法の変化に柔軟に対応するため、様々な使用方法に対応できる空間とすることにより、オープンスペースと同じようにアクティブラーニング時の使用や学年でまとまった活動を行う場合は大きな空間を生み出し、少人数指導や個別指導などを行う場合は小さな空間で行うなど、授業のニーズにあわせて空間（教室）を変化させ使用するとともに、児童増にも対応できる体制を整えることが可能になる。

また、効率良く空間を生み出すことにより、延床面積の増加による施設維持管理の負担を低減し、その低減した分をICT機器の充実に充当することも考えられる。ICT機器の充実は、オープンスペースを活用した授業など、新しい授業を推進する際に、教職員にかかる過度の負担を軽減する大事な要素と言える。

今後、ICT機器の充実とともに、さまざまな授業展開が考えられ、授業の内容にあわせて変化させることのできる空間づくりが重要である。オープンスペース型運営方式の良いところを取り入れた形を継続しながらも、アクティブラーニング等将来の授業内容・方法の変化に柔軟に対応するため、様々な使用方法に対応できる空間として、教室前のオープンスペース設置からマルチスペースとして活用できる教室設置への転換を進めていく。

効率の良い空間の創出により、延床面積の増加を抑え、ICT機器の充実にシフトし、教職員の負担を抑え、将来の状況変化にも対応し、持続可能なしつらえを目標としていく。

2 教科センター方式について

教科センター方式の導入が、平成25年度の赤塚第二中学校の改築を機に始まった。検証結果のとおり、学力の向上については良好な結果が得られており、生徒の授業に対する意欲向上にも効果をもたらされていると考えられる。赤塚第二中学校は、教科センター方式導入にあたり大学と連携して全校体制で授業方法の研究に取り組み、良好な結果につながっている。

生徒にとってホームルーム、ホームベースが自分たちの居場所になっており、生徒たちのクラスに対する帰属意識は、普段の学校生活や行事をとおして醸成されている。

一方で、教科教員室の稼働率は低く、活用頻度の低い空間が存在するという、施設利用の非効率性も確認された。

この検証結果を踏まえると、教科センター方式は効果を認められるものの、面積の増加に反してメディアスペースや教科教員室の稼働率の低さ、建設経費や光熱水費など財政面の負担も大きいことが確認される。

3 教科教室型運営方式について

教科教室型運営方式を採用している学校に対する検証の結果として、学級に割り当てていない教室のある学校では、教科教室型運営方式を一部または全教科導入しており、掲示物に対する工夫などによって、従来型の教室配置（特別教室型）でありながらも教科センター方式に近い運営が可能になっている。

従来型校舎または板橋第三中学校のようにフレキシブルに使用できる「特別活動室」の設置により、学級の増には従来型の教室配置（特別教室型）を採用し、学級の減により学級に割り当てていない教室が生まれれば一部または全部教科教室型方式を採用する、将来的な学級の増減への対応が可能と考えられる。

また、生徒の居場所、帰属意識の醸成についても、教科教室を学級に割り当てることにより確立し対応が可能と考えられる。

板橋第三中学校の「特別活動室」の例から、学級に割り当てていない多目的に使える教室を設け、教科教員室やメディアスペースのあり方を見直すことにより、タブレットP C・電子黒板の充実や無線LAN環境の拡大、デジタル教科書の教科数増などICT機器の充実をめざし、効率の良い施設整備への転換を図っていきたい。

今回アンケート等により再度検証を行った。新しい学校運営方式導入の狙いは、オープンスペース型運営方式、教科センター方式のメリットとして確認された。その一方で、施設維持管理費の増加や光熱水費の増加、オープンなスペースが増えたことによる懸念などが挙げられた。

これに対し、教科教室型運営方式という教科センター方式のメリットを取り入れながら、その課題とする部分を低減し、さらに従来型の校舎でも運営を展開できる方式も確認された。

教科センター方式の考え方について、大きなメリットとして認識される教科教室型運営方式を継続する。改築校においては、学級に割り当てない特別活動室など多目的に使える教室を設け、教科教員室やメディアスペースなどを絞ることにより延床面積の増加を抑え、ICT機器の導入や校庭面積に振り分けることで、メリットを取り入れながら課題を極力抑えていく。既存校であっても、学級に割り当てていない教室を創り出す工夫を行い、大学との連携など教員のレベルアップ、ICT機器の設置などバランスよく行っていく。

最後に稼働率の低いスペースを見直し、柔軟に対応できる教室を増やすことにより、一時的な生徒数増に対応しながらも延床面積の増大化を抑えていく。限られた財源を有効活用することが重要であり、ハードからソフトへシフトし、大学連携等により教員のレベルアップを図り、ICT機器の充実に注力し、将来の社会・教育方法の変化に対応していく。

**オープンスペース型運営方式・教科センター方式検証報告書
資料編**

アンケート実施：平成30年11月～12月

令和元年12月

板橋区教育委員会

資料1 オープンスペース方式に関するアンケート

1 アンケート調査の概要

学校名	板橋第一小学校	大谷口小学校
実施期間	平成30年11月8日から11月16日まで	
対象	3年生以上の児童 教職員（校長・副校長・担任・教科教員・教務主任）	
配付数	児童用 330件 教職員用 19件	児童用 185件 教職員用 14件
実施方法	配布した調査票への記載による	
回収数	児童用 322件 (98%) 教職員用 18件 (95%) 合計 340件 (97%)	児童用 181件 (98%) 教職員用 12件 (86%) 合計 193件 (97%)

※ 教職員分の集計は、調査母数が少ないため無記入を除く全回答数に占める割合で集計した

2 児童アンケート

(1) 板橋第一小学校

(調査票)

オープンスペースのある教室について

板橋区教育委員会では、みなさんの教室がどのように授業に役立っているか調べています。
毎日の生活で感じたことを教えてください。

板橋第一小学校 ____年（男・女）

あなたは、次のようなことをどれくらい感じますか。

		とても そう思う	わりと そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	ぜんぜん 思わない
① 友達やグループで話し合う時、場所が広く取れるのでよい。	5	4	3	2	1	
② 大きな紙を広げて作業しやすい。	5	4	3	2	1	
③ 廊下と教室の間に壁がないと落ち着かない。	5	4	3	2	1	
④ そうじが大変だ。	5	4	3	2	1	
⑤ 教室以外に小さな部屋があって、いろいろな使い方ができる。	5	4	3	2	1	
⑥ 勉強中に違うクラスが廊下を通ると気になる。	5	4	3	2	1	
⑦ 作品などを掲示する場所がたくさんあってよい。	5	4	3	2	1	
⑧ いつも、誰かに見られているような気がする。	5	4	3	2	1	
⑨ 学校公開の時など、廊下がにぎやかに感じる。	5	4	3	2	1	
⑩ となりのクラスの勉強の様子がよく分かる。	5	4	3	2	1	
⑪ 学習発表会などがしやすい。	5	4	3	2	1	
⑫ 本を読んだり、友達とおしゃべりしたりするときオープンスペースを使いたい。	5	4	3	2	1	
⑬ となりのクラスの声が聞こえてきて、勉強のじやまになる。	5	4	3	2	1	
⑭ 教室以外の小さな部屋でいたずらする子がふえる。	5	4	3	2	1	
⑮ 教室に壁がないので、となりのクラスの子とも親しくなりやすい。	5	4	3	2	1	
⑯ 先生の目がとどかないことがある。	5	4	3	2	1	

その他、気がついたことがあれば、自由に書いてください。

(2) 大谷口小学校

(調査票)

オープンスペースのある教室について

板橋区教育委員会では、みなさんの教室がどのように授業に役立っているか調べています。
毎日の生活で感じたことを教えてください。

大谷口小学校 _____ 年 (男・女)

あなたのクラスは手前の部屋ですか。奥の部屋ですか。 手前 奥

あなたは、次のようなことをどれくらい感じますか。 とても わりと まあ あまり ぜんぜん
そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

- | | | | | | | | | | |
|--|---|----|---|----|---|----|---|----|---|
| ① 友達やグループで話し合う時、場所が広く取れるのでよい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ② 書写の時間や社会科の時間、大きな紙を広げて作業しやすい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ③ 廊下と教室の間に壁がないと落ち着かない。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ④ そうじが大変だ。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑤ 勉強中に違うクラスが後ろを走ると気になる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑥ 作品などを掲示する場所がたくさんあってよい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑦ いつも、誰かに見られているような気がする。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑧ 学校公開の時など、廊下がにぎやかに感じる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑨ となりのクラスの勉強の様子がよく分かる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑩ 学習発表会などがしやすい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑪ 本を読んだり、友達とおしゃべりしたりするとき
オープンスペースを使いたい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑫ 廊下を挟んだ他の教室から声が聞こえて、勉強のじゃまになる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑬ 教室以外の場所でいたずらする子がふえる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑭ オープンスペースを使って他のクラスの
友達と一緒に勉強ができる。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑮ 空きスペースがあるので、他のクラスの子とも親しくなりやすい。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |
| ⑯ 先生の目がとどかないことがある。 | 5 | …… | 4 | …… | 3 | …… | 2 | …… | 1 |

その他、オープンスペースの良いところやこれからやってみたいことについて、自由に書いてください。

(3) アンケート結果の概要

【児童アンケート（共通）】	学校別	5(とてもそう思う)		4(わりとそう思う)		3(まあそう思う)		2(あまり思わない)		1(全然思わない)		計	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
①友達やグループで話し合う時、場所が広く取れるのでよい。	板一小	188人	58%	72人	22%	33人	10%	21人	7%	8人	2%	322人	100%
	大谷口小	99人	55%	49人	27%	24人	13%	6人	3%	3人	2%	181人	100%
②廊下と教室の間に壁がないと落ち着かない。	板一小	22人	7%	15人	5%	34人	11%	68人	21%	183人	57%	322人	100%
	大谷口小	14人	8%	8人	4%	9人	5%	36人	20%	113人	63%	180人	100%
③掃除が大変だ。	板一小	28人	9%	17人	5%	36人	11%	90人	28%	150人	47%	321人	100%
	大谷口小	18人	10%	11人	6%	25人	14%	54人	30%	73人	40%	181人	100%
④勉強中に違うクラスが後ろを通ると気になる。	板一小	64人	20%	49人	15%	59人	18%	74人	23%	74人	23%	320人	100%
	大谷口小	25人	14%	23人	13%	39人	22%	24人	13%	69人	38%	180人	100%
⑤作品などを掲示する場所がたくさんあってよい。	板一小	187人	58%	52人	16%	55人	17%	15人	5%	11人	3%	320人	100%
	大谷口小	105人	59%	36人	20%	22人	12%	10人	6%	6人	3%	179人	100%
⑥いつも、誰かに見られている気がする。	板一小	20人	6%	11人	3%	25人	8%	69人	22%	195人	61%	320人	100%
	大谷口小	15人	8%	13人	7%	18人	10%	36人	20%	97人	54%	179人	100%
⑦学校公開の時など、廊下が賑やかに感じる。	板一小	139人	44%	53人	17%	53人	17%	43人	13%	31人	10%	319人	100%
	大谷口小	54人	30%	43人	24%	32人	18%	30人	17%	22人	12%	181人	100%
⑧となりのクラスの勉強の様子がよく分かる。	板一小	60人	19%	30人	9%	62人	19%	72人	23%	96人	30%	320人	100%
	大谷口小	22人	12%	20人	11%	40人	22%	33人	19%	63人	35%	178人	100%
⑨学習発表会などがしやすい。	板一小	118人	37%	56人	18%	72人	23%	34人	11%	36人	11%	316人	100%
	大谷口小	104人	58%	26人	14%	31人	17%	12人	7%	7人	4%	180人	100%
⑩本を読んだり友達とおしゃべりしたりするときオープンスペースを使いたい。	板一小	156人	49%	49人	15%	35人	11%	40人	12%	41人	13%	321人	100%
	大谷口小	77人	43%	29人	16%	28人	15%	30人	17%	17人	9%	181人	100%
⑪先生の目が届かないことがある。	板一小	68人	21%	39人	12%	55人	17%	81人	25%	78人	24%	321人	100%
	大谷口小	21人	12%	24人	13%	31人	17%	39人	22%	65人	36%	180人	100%

【児童アンケート（板橋第一小学校）】	5(とてもそう思う)		4(わりとそう思う)		3(まあそう思う)		2(あまり思わない)		1(全然思わない)		計	
①大きな紙を広げて作業しやすい。	150人	58%	51人	20%	41人	16%	13人	5%	4人	2%	259人	100%
②教室以外に小さな部屋があって、いろいろな使い方ができる。	100人	39%	50人	19%	38人	15%	38人	15%	32人	12%	258人	100%
③となりのクラスの声が聞こえてきて、勉強のじやまになる。	44人	17%	20人	8%	44人	17%	73人	28%	76人	30%	257人	100%
④教室以外の小さな部屋でいたずらする子が増える。	41人	16%	28人	11%	53人	21%	57人	22%	78人	30%	257人	100%
⑤教室に壁がないので、となりのクラスの子とも親しくなりやすい。	64人	25%	46人	18%	69人	27%	37人	14%	40人	16%	256人	100%

ト

【児童アンケート（大谷口小学校）】	5(とてもそう思う)		4(わりとそう思う)		3(まあそう思う)		2(あまり思わない)		1(全然思わない)		計	
①書写の時間や社会科の時間、大きな紙を広げて作業しやすい。	106人	59%	39人	22%	25人	14%	8人	4%	3人	2%	181人	100%
②廊下を挟んだ他の教室から声が聞こえて、勉強のじやまになる。	17人	9%	19人	10%	26人	14%	48人	27%	71人	39%	181人	100%
③教室以外の場所でいたずらする子が増える。	33人	18%	16人	9%	33人	18%	41人	23%	56人	31%	179人	100%
④オープンスペースを使って他のクラスの友達と一緒に勉強ができる。	95人	53%	34人	19%	27人	15%	15人	8%	8人	4%	179人	100%
⑤空きスペースがあるので、他のクラスの子とも親しくなりやすい。	63人	35%	39人	22%	41人	23%	19人	10%	19人	10%	181人	100%

【児童アンケート（板橋第一小学校 自由意見）】

- ・オープンスペースで走る人がいてうるさい。(3年生・5年生)
- ・小部屋で遊んでいる人がいる。(3年生)
- ・オープンスペースをもっといろいろなことで使いたい。(3年生)
- ・他の学校にはない特別なオープンスペースなので、大切に使いたい。何年先もそのままあると良いと思います。(4年生)
- ・荷物置き場がオープンスペースにあるから、教室でも過ごしやすい。(5年生)
- ・雨の日やたてわりするとき使えて遊びやすい。(6年生)

【児童アンケート（大谷口小学校 自由意見）】

- ・なにか練習する時にオープンスペースを使えるので良い。(3年生)
- ・学級みんながグループ分けなどをする時に、オープンスペースを使えて便利だ。(4年生)
- ・教室だけだとつまらないと思うから、あった方が良い。(4年生)
- ・オープンスペースがもう少し広いと良いと思う。(5年生)
- ・オープンスペースで他のクラスと交流できて良い。(6年生)
- ・教室の他に部屋があると、広く使えて良い。(6年生)

3 教職員アンケート

(1) 板橋第一小学校

※大谷口小学校においても、同様のアンケートを実施した。

(調査票)

板一小・教職員(学級担任)

オープンスペース方式についてのアンケート

各設問について、当てはまる箇所に丸印またはご記入ください。

○現在受け持っている学年を教えてください。

【 】年生

○板橋第一小学校での在籍年数を教えてください。

【 】年目

○教職について何年目ですか。

【 】

【1.児童の生活面】

とても
そう思う

わりと
そう思う

まあ
そう思う

あまり
思わない

ぜんぜん
思わない

① 児童同士がクラスをこえた学年としてのまとまりをもちやすい。
5 4 3 2 1

② 児童たちの生活態度は落ち着いている。
5 4 3 2 1

③ 特別な支援を要する児童にとっては落ち着かないことがある。
5 4 3 2 1

④ 子ども同士の学年の壁がなくなり、友人関係の輪が広がる。
5 4 3 2 1

⑤ 教室をオープンにした状態であると児童たちは授業中、様々な音に気が逸れることがある。
5 4 3 2 1

【2.児童の動線】

とても
そう思う

わりと
そう思う

まあ
そう思う

あまり
思わない

ぜんぜん
思わない

⑥ 隣のクラスと授業開始・終了の時刻がずれると、子どもたちが廊下を通るため、音や声が気になる。
5 4 3 2 1

⑦ オープンスペースがあることで、休み時間や給食準備等で、走り回ったりふざけあつたりする児童が多い。
5 4 3 2 1

【3.教職員の運用面】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑧ オープンであるため、教員は常にみられているという緊張感が持てる。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑨ 教員同士の共通理解を図ることにより、学年での協力体制が作りやすく、学年経営が行いやすい。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑩ 音への配慮から、隣のクラスの時間割を常に気にしなければならぬ。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑪ オープンスペースで学年活動や学級活動(係活動など)がしやすい。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑪-2 その理由を教えてください。

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑫ オープンスペースはアクティブラーニングに適している。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑫-2 その理由を教えてください。

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑬ オープンスペースで学習用具や教材などが学年ごとに活用しやすい。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

【4.施設面】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑭ 授業参観の際に、保護者同士の私語が聞こえてしまう。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑮ 授業中、オープンにするとときと、扉を閉めるときは使い分けていますか。

【5.教育上】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑯ オープンであるため、児童は常にみられているという緊張感を持ちながら授業を受けている。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑰ オープンな教室のため、「いじめ」「体罰」などが起きにくい。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑱ オープンスペースを活用しながら普段の授業を行いたい。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

⑲-2 質問⑱で5～4を選択した場合、どのような場面でオープンスペースを活用したことがありますか。

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑲ 指導の様子や児童の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

【6.その他】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑳ オープンスペース方式に対する不安があるとの保護者意見がある。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1

㉑ オープンスペースの優れた点があればご記入ください。

㉒ オープンスペース方式の課題があればご記入ください。

㉓ その他ご意見がありましたらご記入ください。

(2) アンケート結果の概要

教職員アンケートについては、調査母数が少ないため、全回答数（無記入は除く）に占める割合で集計した。

【教職員アンケート（共通）】	学校別	5 (とてもそう思う)	4 (わりとそう思う)	3 (まあそう思う)	2 (あまりそう思わない)	1 (全然思わない)	計
①児童同士がクラスを超えた学年としてのまとまりをもちやすい。	板一小	6%	28%	50%	11%	6%	100%
	大谷口小	33%	50%	17%	0%	0%	100%
②児童たちの生活態度は落ち着いている。	板一小	0%	17%	33%	44%	6%	100%
	大谷口小	0%	33%	50%	17%	0%	100%
③特別な支援を要する児童にとっては落ち着かないことがある。	板一小	50%	27%	11%	11%	0%	100%
	大谷口小	16%	33%	25%	25%	0%	100%
④子ども同士の学年の壁がなくなり、友人関係の和が広がる。	板一小	6%	28%	39%	22%	5%	100%
	大谷口小	33%	33%	17%	17%	0%	100%
⑤教室をオープンにした状態であると児童たちは授業中、様々な音に気が逸れることがある。	板一小	50%	27%	17%	6%	0%	100%
	大谷口小	33%	33%	17%	17%	0%	100%
⑥隣のクラスと授業開始・終了の時刻がずれると、子どもたちが廊下を通るため、音や声気になる。	板一小	67%	28%	5%	0%	0%	100%
	大谷口小	50%	17%	8%	25%	0%	100%
⑦オープンスペースがあることで、休み時間や給食準備等で走り回ったりふざける児童が多い。	板一小	50%	50%	0%	0%	0%	100%
	大谷口小	41%	25%	17%	17%	0%	100%
⑧オープンであるため、教員は常に見られているという緊張感が持てる。	板一小	0%	28%	44%	28%	0%	100%
	大谷口小	0%	50%	33%	17%	0%	100%
⑨教員同士の共通理解を図ることにより、学年での協力体制が作りやすく、学年経営が行いやすい。	板一小	11%	22%	50%	11%	6%	100%
	大谷口小	25%	33%	25%	17%	0%	100%
⑩音への配慮から、隣のクラスの時間割を常に気にしなければならない。	板一小	16%	56%	16%	11%	0%	100%
	大谷口小	17%	25%	33%	17%	8%	100%
⑪オープンスペースで学年活動や学級活動（係活動など）がしやすい。	板一小	11%	22%	56%	11%	0%	100%
	大谷口小	50%	50%	0%	0%	0%	100%

【教職員アンケート（共通）】	学校別	5 (とてもそう思う)	4 (わりとそう思う)	3 (まあそう思う)	2 (あまりそう思わない)	1 (全然思わない)	計
⑫オープンスペースはアクティブラーニングに適している。	板一小	11%	22%	50%	16%	0%	100%
	大谷口小	8%	25%	50%	16%	0%	100%
⑬オープンスペースで学習用具や教材などが学年ごとに活用しやすい。	板一小	17%	35%	48%	0%	0%	100%
	大谷口小	0%	41%	41%	18%	0%	100%
⑭授業参観の際に、保護者同士の私語が聞こえてしまう。	板一小	50%	27%	22%	0%	0%	100%
	大谷口小	41%	25%	25%	8%	0%	100%
⑮オープンであるため、児童は常に見られているという緊張感を持ちながら、授業を受けている。	板一小	0%	0%	24%	70%	6%	100%
	大谷口小	0%	0%	25%	67%	8%	100%
⑯オープンな教室のため、「いじめ」「体罰」などが起きにくい。	板一小	0%	12%	12%	58%	17%	100%
	大谷口小	8%	8%	42%	42%	0%	100%
⑰指導の様子や児童の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。	板一小	0%	19%	44%	25%	12%	100%
	大谷口小	0%	17%	50%	33%	0%	100%
⑱オープンスペース方式に対する不満があるとの保護者意見がある。	板一小	0%	0%	31%	50%	19%	100%
	大谷口小	0%	8%	25%	33%	33%	100%

【教職員アンケート（板橋第一小学校）】

設 問	とてもそう思う← まあそう思う →全然思わない					計
	5	4	3	2	1	
①オープンスペースを活用しながら普通の授業を行いたい。	6%	28%	50%	11%	6%	100%

どのような場面でオープンスペースを活用したことがありますか。

- ・グループ学習で少し場を離したい時 ・学年での音楽練習 ・学年集会
- ・子ども同士が話し合ったり、協働で作業する場面

【教職員アンケート（板橋第一小学校 自由記述）】

① オープンスペースの課題

- ・給食時に教室が狭いため、廊下（オープン）で配膳を行っていて衛生面が気になるし、廊下の幅が狭く、配膳台が通りにくい。
- ・オープンの場所は広くて良いが、そのために教室が狭いのでは日々使いにくい。
- ・学習の場という意識よりも遊び場と思っている児童が多い。走り回ったり、大声で話したりすることが多い。
- ・周囲の音が気になって、児童の集中が途切れることがある。

② オープンスペースの優れた点

- ・グループ活動や総合の学習などに役に立つ。
- ・常にみられているという意識が教員に働き、行き過ぎた叱責などを抑えられる。
- ・各クラスの雰囲気を感じ取りやすい。
- ・教室を広く使える。
- ・学習に必要なものを使いやすい状態で置いておける。

③ その他意見

- ・学年が2クラスの時はその教室にオープンスペースはあるが、3クラスになるとどうしても面していないクラスは利用しにくい。
- ・授業はオープン（よこ）からではなく、教室に入って同じ空気感で見てほしい。今後、小学校にも一部教科担任制を取り入れたり、また、学年担任という意識を持たせたりするためにオープンスペースは有効と考える。

【教職員アンケート（大谷口小学校）】

設 問	とてもそう思う← まあそう思う →全然思わない					計
	5	4	3	2	1	
①扉をあけて、オープンスペースを活用しながら普段の授業を行っている。	42%	25%	25%	8%	0%	100%

どのような場面でオープンスペースを活用したことがありますか。

- ・集会 ・作業場 ・面談 ・グループ活動
- ・低学年の場合、音楽科や図工科や生活科を学年で行うことが多く、場が確保されているのは使いやすい。
- ・「～が終わった人はオープンスペースで…をしよう」など。単元に関わる図書を置いておけるので、読書スペースにもなっている。

【教職員アンケート（大谷口小学校 自由記述）】

① オープンスペースの課題

- ・児童の集中が音によってそれてしまう。
- ・広すぎて、児童が走り回り、外に行かない。その延長で廊下も走るようになる。
- ・落ち着かない。走りたくなってしまふ。クラスと廊下の区切りがない。
- ・扉は必ずほしい。必ず静かにさせる授業は必要だから。

② オープンスペースの優れた点

- ・ある程度の広いスペースがいつでも確保されていること。
- ・学年朝会、作業等が行いやすい。
- ・広い作業場 ・グループ活動がやりやすい。

資料2 教科センター方式に関するアンケート

1 アンケート調査の概要

学校名	赤塚第二中学校	中台中学校
実施期間	平成30年11月21日から12月14日まで	
対象	全生徒・保護者・教職員（校長・副校長・担任・教科教員・教務主任）	
配付数	生徒用、保護者用 各518枚 教職員用 27枚	生徒用、保護者用 各448枚 教職員用 34枚
実施方法	配布した調査票への記載による	
回収数	生徒用 328枚 (64%) 保護者用 329枚 (64%) 教職員用 16枚 (59%) 全体 673枚 (63%)	生徒用 410枚 (92%) 保護者用 132枚 (29%) 教職員用 20枚 (59%) 全体 562枚 (60%)

2 生徒アンケート

(1) 赤塚第二中学校

※ 中台中学校においても、同様のアンケートを実施した。

(調査票)

赤塚第二中・生徒用

教科センター方式についてのアンケート

赤塚第二中学校 ____年 (男・女)

あなたは、次のようなことをどれくらい感じますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	ぜんぜん 思わない
① 毎時間の教室移動が大変だ。	5	4	3	2	1
② 教室移動があるため、時間を考えて行動している。	5	4	3	2	1
③ 異学年との交流がある。	5	4	3	2	1
④ そろじが大変だ。	5	4	3	2	1
⑤ 授業が始まる前や放課後に、メディアスペースを活用している。	5	4	3	2	1

⑤-2 いつ、どのように活用していますか。

あなたは、次のようなことをどれくらい感じますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	ぜんぜん 思わない
⑥ 廊下から教室が見られるので、普段から「見られている」という意識から適度な緊張感をもって授業が受けられている。	5	4	3	2	1
⑦ 教科教室で学ぶことで、授業に集中できる。	5	4	3	2	1
⑧ 意欲的に授業へ参加している。	5	4	3	2	1

⑨ どういう時にクラスのまとまりを感じますか。(もしくは感じませんか。)

- ⑩ 学校で好きな場所とその理由を教えてください。

好きな場所()※部屋名を記入してください。

- ⑪ 使いにくい場所はどこですか。その理由を教えてください。

使いにくい場所()※部屋名を記入してください。

- ⑫ どの教室・スペースが使いやすいですか。また、その理由を教えてください。

使いやすい場所()※部屋名を記入してください。

- ⑬ 教科センター方式の良いところはどんなところだと思いますか。

- ⑭ 教科センター方式の課題はどんなところだと思いますか。

(2) アンケート結果の概要

【生徒アンケート（共通）】	学校別	5 (とてもそう思う)		4 (わりとそう思う)		3 (まあそう思う)		2 (あまり思わない)		1 (全然思わない)		計	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
①毎時間の教室移動が大変だ。	赤二中	94人	29%	81人	25%	80人	25%	46人	14%	22人	7%	323人	100%
	中台中	84人	24%	83人	24%	103人	29%	61人	17%	21人	6%	352人	100%
②教室移動があるため、時間を考えて行動している。	赤二中	203人	63%	81人	25%	30人	9%	7人	2%	3人	1%	324人	100%
	中台中	121人	34%	132人	38%	74人	21%	16人	5%	9人	3%	352人	100%
③異学年との交流がある。	赤二中	91人	28%	78人	24%	76人	24%	55人	17%	23人	7%	323人	100%
	中台中	78人	22%	88人	25%	81人	23%	80人	23%	25人	7%	352人	100%
④掃除が大変だ。	赤二中	37人	12%	42人	13%	75人	23%	112人	35%	54人	17%	320人	100%
	中台中	64人	18%	58人	16%	88人	25%	105人	30%	37人	11%	352人	100%
⑤授業が始まる前や放課後にメディアスペース（学びの広場）を活用している。	赤二中	27人	8%	87人	25%	68人	19%	106人	30%	62人	18%	350人	100%
	中台中	31人	9%	60人	17%	98人	28%	100人	28%	63人	18%	352人	100%
⑥廊下から教室が見られるので、普段から「見られている」という意識から適度な緊張感をもって授業が受けられている。	赤二中	31人	10%	87人	27%	68人	21%	82人	25%	54人	17%	322人	100%
	中台中	20人	6%	60人	17%	94人	27%	118人	34%	58人	17%	350人	100%
⑦教科教室で学ぶことで、授業に集中できる。	赤二中	97人	30%	96人	30%	84人	26%	36人	11%	11人	3%	324人	100%
	中台中	47人	14%	83人	24%	118人	34%	71人	21%	27人	8%	346人	100%
⑧意欲的に授業へ参加している。	赤二中	154人	48%	109人	34%	53人	16%	7人	2%	1人	0%	324人	100%
	中台中	95人	27%	124人	36%	101人	29%	22人	6%	4人	1%	346人	100%

【生徒アンケート・メディアスペースの活用】

設問5-②：メディアスペースの活用（時間帯）	赤塚第二中学校	中台中学校
勉強をするとき	19% (30人)	53% (127人)
調べ学習をするとき	1% (2人)	2% (5人)
勉強が分からないとき	4% (6人)	1% (3人)
先生に分からないところを聞くとき	1% (2人)	1% (3人)
友達と話すとき	38% (59人)	4% (9人)
友達を待つとき	3% (5人)	2% (4人)
メディアスペースで新しい展示や企画ができたとき	5% (7人)	1% (2人)
朝の始業前	1% (1人)	1% (2人)
放課後など時間があるとき	8% (12人)	3% (8人)
休み時間	18% (28人)	5% (13人)
昼休み	1% (2人)	1% (3人)
テストの前	1% (1人)	25% (59人)
計（回答数）	100% (155人)	100% (238人)

設問5-②：メディアスペースの活用（目的）	赤塚第二中学校	中台中学校
本や資料を読む	40% (55人)	9% (8人)
異学年が学んでいることを知るために活用する	1% (2人)	5% (5人)
次の教科の内容の広場でその教科のムードにして集中している	1% (2人)	0% (0人)
部活などで活用する	1% (2人)	2% (2人)
委員会で使用する	1% (2人)	0% (0人)
掲示物をたまにみる	3% (4人)	5% (5人)
遊び場	15% (21人)	8% (7人)
座る場所	1% (2人)	1% (1人)
ゆっくり休む場所として活用している	4% (6人)	6% (6人)
その他	5% (7人)	8% (7人)
活用していない。	25% (35人)	56% (52人)
計（回答数）	100% (138人)	100% (93人)

【生徒アンケート・クラスのまとめり】

設問⑨：クラスのまとめりを感じる時	赤塚第二中学校	中台中学校
授業中に意見のすり合わせをする時クラスのまとめりを感じる。	9% (26人)	8% (29人)
行事の時クラスのまとめりを感じる。	34% (96人)	39% (147人)
クラスで何かをする時クラスのまとめりを感じる。	13% (35人)	14% (51人)
移動の時に声を掛け合って移動する時クラスのまとめりを感じる。	4% (12人)	2% (8人)
チャイム着席時クラスのまとめりを感じる。	9% (24人)	1% (3人)
あいさつするときクラスのまとめりを感じる。	0% (0人)	1% (4人)
静かにしなければいけない時、注意しあって静かにできることにまとめりを感じる。	6% (17人)	3% (11人)
クラス全員が授業に集中している時まとめりを感じる。	6% (21人)	3% (13人)
グループ(班)で協力して何かをする時、まとめりを感じる。	17% (48人)	5% (18人)
常時感じる。	0% (0人)	1% (3人)
授業以外でクラスのまとめりを感じることはない。	0% (0人)	2% (8人)
クラスが騒がしい時クラスにまとめりがないと感じる。	0% (0人)	2% (7人)
チャイム着席をしない人がいるとクラスのまとめりを感じない。	0% (0人)	1% (5人)
特になし	0% (0人)	13% (50人)
分からない	0% (0人)	3% (10人)
その他	0% (0人)	2% (9人)
計(回答数)	100% (279人)	100% (376人)

【生徒アンケート・教科センター方式の良いところ（上位5位）】

赤塚第二中学校（有効回答数 306）		中台中学校（有効回答数 380）	
時間を意識して行動できるところ	18% (56人)	時間を意識して行動できるところ	16% (60人)
他学年との交流	13% (39人)	教科の空間があるところ	15% (56人)
教科の空間があるところ	11% (35人)	他学年との交流	12% (47人)
授業ごとに気持ち切り替えられるところ	11% (35人)	授業ごとに気持ち切り替えられるところ	6% (21人)
教室移動で気分が変わり、やる気が出る	7% (20人)	授業に集中できるところ	6% (21人)

【教科センター方式の課題（上位5位）】

赤塚第二中学校（有効回答数 305）		中台中学校（有効回答数 387）	
重い荷物を持って教室移動すること	31% (94人)	移動するのが大変な時があること	28% (107人)
移動するのが大変な時があること	22% (68人)	授業が延長したときに、次の授業に遅れそうになること	8% (31人)
休み時間の廊下が人でいっぱいになること	9% (28人)	忘れ物や、なくしものの多さ	7% (29人)
授業が延長したときに、次の授業に遅れそうになること	7% (21人)	移動に時間を取られ、休み時間が減ってしまうこと	7% (29人)
忘れ物の多さ	4% (11人)	その他（教室が多すぎる、ロッカーを広くしてほしい等）	6% (24人)

3 保護者アンケート

(1) 赤塚第二中学校

※中台中学校においても、同様のアンケートを実施した。(調査票)

赤塚第二中・保護者用

教科センター方式についてのアンケート

赤塚第二中学校 ____年 (男・女) 保護者

- ① 教科センター方式で学ぶことで、学習面の変化はありましたか。

- ② 兄弟で改築前(平成25年以前)の赤塚第二中学校に通っていたお子さんはいらっしゃいますか。

はい いいえ

- ②-2 「はい」と答えた方 改築前と比べて相違点やご意見はありますか。

- ③ その他ご自由にご意見をお寄せください。

(2) アンケート結果の概要

【設問① 教科センター方式で学ぶことで、学習面の変化はありましたか。】

赤塚第二中学校（有効回答数 305）		中台中学校（有効回答数 129）	
特に変化を感じることはない	45% (137 人)	特に変化を感じることはない	39% (50 人)
分からない	14% (43 人)	気持ちを切り替えて教科別の学習にのぞむことができるようになった	13% (17 人)
気持ちを切り替えて教科別の学習にのぞむことができるようになった	9% (26 人)	分からない	11% (14 人)
意欲的に授業に参加できるようになった	5% (16 人)	時間の管理を意識するようになった	5% (7 人)
時間の管理を意識するようになった	5% (15 人)	施設整備が整っていて、勉強しやすい環境だと思う	5% (7 人)

【設問② 兄弟で改築前の学校に通っていたお子さんはいらっしゃいますか。

「ある」場合改築前と比べて相違点やご意見はありますか。（抜粋）】

赤塚第二中学校（該当者 39 人）	中台中学校（該当者 26 人）
・改築前と比べて建物がきれいになった。	・校内がとても明るく広く感じます。
・荷物を持って（重いかばん）の移動は負担が大きいうように思う。	・教室を移動するので、学年ごとのエリアを感じにくく、風通しの良さを感じた。
・上の兄弟はプレハブ時代だったが、他学年との交流はなく、殺伐とした感じだったが、今は他学年と気軽にあいさつできるなごやかな感じがする。	・他クラス、学年の友人と接する時間が増えた。
・教室を移動する時間や用意が大変になったことで余裕がなくなった気がする。	・今では見慣れたが、入学した頃は教室の移動がぞろぞろダラダラとして無駄なのではと思った。
・勉強しやすい（気持ちの切り替え）ができるようになった	・教室の移動に時間がかかるようなので、決まった教室で授業を受ける方が集中できるのではないかと思いました。
・改築以前だとなかなか他学年の階へ行くことはなかったが、教科センター方式だと階を移動するので、他学年の授業を見えるところなど、明るくてメディアスペースもあり、いろいろな資料なども置いてあり、良いと思っている。	・全体的にかなり明るくあたたかいイメージになり、多目的室やメディアスペース、教科ステーションなど話し合いや調べごと、相談などできる場所が増えてよかったと思う。

【設問③ その他自由意見】

赤塚第二中学校（有効回答数 140）		中台中学校（有効回答数 49）	
・移動時の荷物が多くて大変に感じる。	37% (52人)	・学びやすい環境だと思う。	14% (7人)
・子ども達に良い刺激を与えていると感じる。	6% (9人)	・子ども達に良い刺激を与えていると感じる。	10% (5人)
・重いカバンを常に背負っているせいで背骨が曲がらないか、身長伸びが悪くならないか心配だ。	4% (6人)	・今後も期待したい。	6% (3人)
・休み時間は移動の時間になるので、子ども達が負担に思う気持ちは大きいと思う。	4% (5人)	・移動が多くて大変に感じる。	4% (2人)
・教科センター方式の成果をあまり理解していないように感じる。	4% (5人)	・教室移動があると、質問があってもできないときがある。	4% (2人)

4 教職員アンケート

(1) 赤塚第二中学校

※中台中学校においても、同様のアンケートを実施した。

(調査票)

赤塚第二中・教職員(教科教員)

教科センター方式についてのアンケート

各設問について、当てはまる箇所に丸印またはご記入ください。

○現在受け持っている学年を教えてください。

1年生 2年生 3年生 その他()

○赤塚第二中学校での在籍年数を教えてください。

【 】年目

○教職について何年目ですか。

【 】

○専科を教えてください。

【 】

【1.生徒の生活面】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

- クラスとしてホームルームに集まる時間が、朝と帰りの学級
① 活動と給食時等に限られており、帰属意識を持つことが困難である。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1
-
- ② 生徒たちの生活態度は落ち着いている。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1
-
- ③ ホームルームに滞在している時間が短いので、居場所がない生徒が見受けられる。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1
-
- ④ 授業が始まる前や放課後、生徒達がメディアスペースや教室室内で勉強の話をしている。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1
-
- ⑤ メディアスペースは、生徒が宿題をしているなど、雰囲気が良い。 5 …… 4 …… 3 …… 2 …… 1
-
- ⑥ メディアスペースを生徒たちはどのように活用していますか。

【2.生徒の動線】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑦ 教室移動があるため生徒たちが時間を考えた行動をしている。 5 4 3 2 1

⑧ 教科教室への移動の際に、異学年の生徒と動線が交差することがあるが、先輩・後輩の関係に起因する問題は発生していない。 5 4 3 2 1

⑨ 毎時限の移動により、落ち着かない生徒が出ている。 5 4 3 2 1

⑨-2 ⑨で5～4を選択した場合、どんな様子ですか。

【3.教職員の運用面】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑩ 教科教室で授業を行う方が、従来型の各教室で授業を行うより行いやすい。 5 4 3 2 1

⑪ 教科教室の隣に教科教員室(ステーション)があるので、教材管理がしやすい。 5 4 3 2 1

⑫ 教科教員室(ステーション)がベテラン教員から若手教員への指導の場となっている。 5 4 3 2 1

⑬ 教科教室があることにより、日々の時間割の中での授業準備にかかる時間が減少した。 5 4 3 2 1

⑬-2 ⑭の理由を教えてください。

⑭ 職員室と教科教員室の在席割合を教えてください。

1日の		1日の	
職員室	%	:	教科教員室
			%

⑮ メディアスペースを教職員の方はどのように活用していますか。

【4.施設面】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わな 思わない

⑯ 生徒に自分の学級、自分の机という意識があまりないと感じる。 5 4 3 2 1

⑰ 教科教室の壁が薄く、隣の教室の音が伝わってくるがある。 5 4 3 2 1

【5.教育上】

とても わりと まあ あまり ぜんぜん
 そう思う そう思う そう思う 思わない 思わない

⑱ 生徒が次の授業を意識するようになり、授業に臨むという主体的な姿勢でいる。 5 4 3 2 1

⑲ 廊下から教室内が見える設計なので、生徒も見られている意識から、適度な緊張感をもって授業を受けている。 5 4 3 2 1

⑳ 指導の様子や生徒の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。 5 4 3 2 1

㉑ 教科センター方式に対する不安があるとの保護者意見がある。 5 4 3 2 1

㉒ 教科センター方式の優れた点があればご記入ください。

㉓ 教科センター方式の課題があればご記入ください。

㉔ その他ご意見がありましたらご記入ください。

(2) アンケート結果の概要

教職員アンケートについては、調査母数が少ないため、全回答数（無記入は除く）に占める割合で集計した。

【教職員アンケート（共通）】	学校別	5(とてもそう思う)	4(わりとそう思う)	3(まあそう思う)	2(あまり思わない)	1(全然思わない)	計
①クラスとしてホームルーム（ホームベース）に集まる時間が、朝と帰りの学級活動と給食時等に限定されており、帰属意識を持つことが困難である。	赤二中	12%	6%	0%	44%	38%	100%
	中台中	0%	20%	15%	50%	15%	100%
②生徒たちの生活態度は落ち着いている。	赤二中	25%	57%	6%	6%	6%	100%
	中台中	5%	45%	40%	10%	0%	100%
③ホームルーム（ホームベース）に在籍している時間が短いので、居場所がない生徒が見受けられる。	赤二中	6%	6%	14%	68%	6%	100%
	中台中	0%	5%	25%	60%	10%	100%
④授業が始まる前や放課後、生徒達がメディアスペースや教室内で勉強の話をしている。	赤二中	6%	31%	31%	19%	13%	100%
	中台中	10%	20%	35%	35%	0%	100%
⑤メディアスペースは生徒が宿題をしているなど雰囲気が良い。	赤二中	6%	38%	38%	18%	0%	100%
	中台中	5%	15%	60%	20%	0%	100%
⑥教室移動があるため、生徒たちが時間を考えた行動をしている。	赤二中	50%	44%	6%	0%	0%	100%
	中台中	15%	50%	30%	5%	0%	100%
⑦教科教室への移動の際に、異学年と動線が交差することがあるが、先輩・後輩の関係に起因する問題は発生していない。	赤二中	44%	50%	6%	0%	0%	100%
	中台中	25%	60%	15%	0%	0%	100%
⑧毎時限の移動により落ち着かない生徒が出ている。	赤二中	6%	19%	13%	56%	6%	100%
	中台中	0%	20%	30%	40%	10%	100%
⑨教科教室で授業を行う方が、従来型の各教室で授業を行うより行いやすい。	赤二中	68%	20%	0%	6%	6%	100%
	中台中	40%	35%	10%	15%	0%	100%
⑩教科教室の隣に教科教員室（ステーション）があるので、教材管理がしやすい。	赤二中	60%	13%	20%	0%	7%	100%
	中台中	50%	30%	15%	5%	0%	100%

【教職員アンケート（共通）】	学校別	5(とても思う)	4(わりと思う)	3(まあ思う)	2(あまり思わない)	1(全然思わない)	計
⑪教科教員室（ステーション）がベテラン教員から若手教員への指導の場となっている。	赤二中	0%	14%	33%	33%	20%	100%
	中台中	16%	32%	21%	26%	5%	100%
⑫教科教室があることにより、日々の時間割の中での授業準備にかかる時間が減少した。	赤二中	36%	14%	21%	21%	8%	100%
	中台中	15%	30%	20%	30%	5%	100%
⑬生徒に自分の学級、自分の机という意識があまりないと感じる。	赤二中	13%	27%	27%	33%	0%	100%
	中台中	10%	30%	25%	35%	0%	100%
⑭教科教室の壁が薄く、隣の教室の音が伝わってくることもある。	赤二中	13%	20%	27%	20%	20%	100%
	中台中	5%	16%	21%	58%	0%	100%
⑮生徒が次の授業を意識するようになり、授業に臨むという主体的な姿勢でいる。	赤二中	20%	67%	13%	0%	0%	100%
	中台中	5%	35%	40%	20%	0%	100%
⑯廊下から教室内が見える設計なので、生徒も見られているという意識から、適度な緊張感を持って授業を受けている。	赤二中	13%	27%	53%	7%	0%	100%
	中台中	0%	25%	35%	35%	5%	100%
⑰指導の様子や生徒の態度など、授業の内容が外から見られるので、指導改善や生活指導に役立つ。	赤二中	7%	20%	20%	40%	13%	100%
	中台中	5%	40%	50%	5%	0%	100%
⑱教科センター方式に対する不安があるとの保護者意見がある。	赤二中	0%	7%	7%	55%	31%	100%
	中台中	0%	5%	25%	65%	5%	100%

【教職員アンケート（赤塚第二中学校・中台中学校 自由記述）】

① 教科センター方式の課題

- ・前時が延びるとチャイム着席が難しい。
- ・教科センター方式は生徒が自主的に動けるようになって初めてこの利点を生かすことが出来ると思う。生徒の自主性や責任感をはぐくむ取組が必要だと思う。
- ・生徒自身の物の管理が徹底されない。忘れ物が多くなる。
- ・教室の数を十分に確保する。
- ・教師による生徒への管理意識が低下するため、移動で次の学校に着任した時苦勞するのではないか。同僚性が構築できなければ孤立する教師が増え、この方式が立ち行かなくなる。

② 教科センター方式の優れた点

- ・時間を意識できる。先のことを考えることができる。見通しを持った行動ができる。
- ・生徒の意識（主体性の）向上、教材を活かしたエリアがあることで授業へのモチベーションもあがる。
- ・同じ教科の教員の授業を目にする機会が多く、授業改善のヒントをもらえることが多い。
- ・授業の準備をした状態で生徒を待てるため、授業の活動の幅が広がる。生徒の授業への意識が変わる。（次の授業を考えその教科を受けに行くため）
クラスを超えて学校全体という意識を強く持てるようになった。

③ その他意見

- ・教科センターをやりきるならどう職員室と使い分けるかがポイントになると思う。教科教員室に行けばいつでも教科の先生がいるという状況はなかなか両立しにくい。
- ・生徒が移動するので学年の教員だけでは目が行き届かない。教員も生徒も学年を超えて関係を築くことが大事だと思う。各学年5クラス以上は多い。

資料3 インフルエンザの罹患率について

毎年度板橋区教育委員会事務局が実施している「インフルエンザ様疾患による臨時休業措置報告」について、調査記録が残っている平成24～29年度の結果は以下のとおりである。

なお、インフルエンザ様疾患による臨時休校措置を実施した学級・学年のうちでの欠席者とインフルエンザ様疾患になりながらも登校した者の数であるので、実際の罹患患者数とは異なっている。

【臨時休業措置報告でのインフルエンザ様疾患罹患患者数】

	板橋 第一小 ※1	大谷口小 ※1	赤塚 第二中 ※1	中台中 ※1	板橋 第三中 ※1	小中 全体 ※2	1校 あたり 平均
平成24年	20人 1.35%	0人 0.00%	48人 3.24%	0人 0.00%	0人 0.00%	1,480人 100.00%	19人 5.20%
平成25年	0人 0.00%	90人 3.59%	66人 2.64%	0人 0.00%	11人 0.44%	2,504人 100.00%	33人 1.30%
平成26年	5人 0.32%	10人 0.64%	0人 0.00%	0人 0.00%	0人 0.00%	1,553人 100.00%	20人 1.32%
平成27年	49人 2.15%	0人 0.00%	0人 0.00%	37人 1.63%	0人 0.00%	2,276人 100.00%	30人 1.32%
平成28年	0人 0.00%	0人 0.00%	25人 1.28%	0人 0.00%	24人 1.23%	1,956人 100.00%	26人 1.32%
平成29年	0人 0.00%	9人 0.37%	17人 0.70%	0人 0.00%	0人 0.00%	2,418人 100.00%	32人 1.32%
平均	12人 0.61%	18人 0.89%	26人 1.28%	6人 0.30%	6人 0.29%	2,031人 100.00%	

※1 臨時休校措置になった際の1回あたりの罹患患者数

※2 区立全小中学校で、臨時休校措置になった際の罹患患者数の合計